

「史学統一」の夢

—戦前（一九二三—一九四五）の大久保利謙—

前田亮介

はじめに

「現代史研究の基礎工作」者の問題圏

歴史家・大久保利謙（一九〇〇—一九九五）の歩みは七〇年におよぶ。この間、大久保は近代日本の文化と政治を主たる対象に、大学史、洋学史、史学史、憲政史、ときに医学史や鉱業史までいたる広範な領域を一次史料の発掘を通じて開拓しつづけた。^①だが、そうしたインフラ整備の次元での貢献がよく知られているのに比べて、親しい人々から「独自の史眼と史風」（遠山茂樹）や「史論と史風」（佐々木克）^②を見出されてきた大久保の歴史叙述の特徴が正面か

ら論じられる機会は、ほとんどなかったように思われる。大久保史学にはどのような「史眼」「史論」「史風」があったのか、また同時代の他の歴史家とはどのように異なっていたのか。本稿はこうした史学思想史の課題に接近すべく、大久保の歴史叙述とそれを取り巻く時代環境の相互作用を時系列に再構成するひとつの試みである。

もともと、大久保史学の内在的な把握を拒んできた要因は、戦後日本の歴史学のうちにも求められそうである。たとえば「私は、大久保「利謙」・遠山「茂樹」両先生の巨大な業績に学びつつ、遅々たる研究を続けてきた。両先生から受けた学恩ははかり知れない」と主著のひとつで謝辞

を捧げる明治維新史家の田中彰^③は、「大久保史学の諸論文は、そのときどきの時流に必ずしも乗ることはない。そして、歴史学研究会をはじめとするいわゆる進歩的歴史学からこれまで十分な評価をうけてきたとはいいがたい。」と一九八八年に記している。自らも帰属意識をもつ第二次大戦後の「いわゆる進歩的歴史学」の内部で、大久保の仕事が十分読まれない状況に田中は六〇年代から声を上げてきたが、その努力の限界を二〇年後も感じざるをえなかったのだろう。大久保が政治的発信に禁欲的だったのも相まって、結果として「進歩的歴史学」の多くにおいては、「時流」から超然とし、官学アカデミズム史学を固守する（無思想の）実証主義者、といったイメージが再生産されていたのではないか。

しかし、政治史家としての大久保像もまた容易に輪郭を結ばない。たとえば「先生と呼びたい方は、やはり大久保（利謙）先生、岡（義武）先生のお二人です。」と振り返る伊藤隆^④は、周知のように一九六〇年代以降の政治史研究において「厳密な史料操作と、政治学的な発想」を武器に、マルクス主義（政治）史学に代わる新たな「正統派」となっていく潮流の担い手（他には、坂野潤治・島海靖・渡邊昭夫、法学部の三谷太郎・佐藤誠三郎ら）であるが、大久保への終生の敬愛にもかかわらず、伊藤が大久保の喜寿記念論

文集や著作集の編集に関与した形跡は、不思議なことに見出せない。もちろん、大久保が近代編（第四・五巻）の責任編者となった『日本歴史大系』（山川出版社、一九八七—一九九）では、伊藤が重要な貢献をしているものの、そこでの執筆者は東大国史／法学部系の政治史家と非講座派系の経済史家を中心であり、喜寿記念の執筆者と重なるのは田中彰くらいで、要するに伊藤と近い（遠山や田中とは遠い）人々が大久保のもとに参集した色彩が強い。大久保の政治史の人脈は、『日本歴史大系』に集ったポスト「戦後歴史学」の伊藤系と、喜寿記念や著作集に関わった「戦後歴史学」の流れを汲む遠山・田中系の二系譜が相交わりことなく、パラレル・ワールドのように並立しているのである。

また伊藤は、大久保主催の歴史家サロンの性格もあつた国立国会図書館憲政資料室について、若き日には「常連の方々」（大久保を除く）となじめなかったこと、また所蔵史料も当時は少なく「そこのお世話にならずに自分自身で史料を発掘して使いたいという気持」から坂野らと史料集を編纂・刊行したこと、「私としては秘かに憲政資料室と対抗していくような気持があった」ことを振り返っている。したがって史料編纂でも二つの系統は交錯しない。一九六〇年代から七〇年代に本格化した、憲政資料室所蔵分を柱とする『伊藤博文関係文書』全九巻（塙書房）の共

同翻刻は、『日本歴史大系』に執筆するような若手研究者が集う一大プロジェクトとなるが、ここには遠山はもちろん大久保の名前もない。逆に、立教大学を拠点としたほぼ同時期の『大久保利通関係文書』全五巻（一九六五—七一）刊行の作業は、大久保・遠山・小西四郎といった喜寿記念の執筆者が主導している。伊藤が師と仰ぐ岡—大久保の間も「没交渉」¹⁵ 気味だったこともあり、マルクス主義史学から脱却して政治過程を追跡しようとした後進の政治家にとつて、大久保（周辺）の叙述のあり方は、先行研究としておそらく微妙に座りが悪かったのだろう。三谷、坂野、御厨、北岡伸一といった研究者による、今日すでに古典的な明治・大正政治史のモノグラフも、大久保の仕事を積極的に参照しているとはいえないが¹⁶。

もつとも、こうした二つの系譜の中間地帯に零れ落ちた大久保の独特の「史論」を再定位することで、松沢裕作のいう「いま自分たちが従事する歴史学なるものの幅に規定」された「窮屈さ」¹⁵ から史学史研究を解放する手がかりが、かえって得られるかもしれない。大久保という失われた環を通して、「系譜論的なもの」ないし「戦後歴史学の源流さ」としてのみ書かれる「史学史」¹⁶ に収斂しないさまざまな歴史（意識）の担い手が交錯するダイナミズムを再現できるように筆者は考えている。大久保に流れこむ官学アカ

デミズムについても、今日の史学史は、史料至上主義で無思想の実証信仰といった単純な理解にも、また制度化された学問分野としての歴史学の自己（意識）形成の歴史にも満足せず、むしろ星雲状態のなかでの実証史学と歴史理論の複雑な関係を切り開きつつあるのである¹⁷。

その際に鍵となるのが、第一に多様な史学や史観を「統一」「総合」するという大久保の歴史叙述観であり、第二に学問的な蓄積が乏しい近現代史研究に不可欠とされる「基礎工作」という独自の用語である。第一については、田中彰がつとに注目した、「大正史学」の画期的な意義を強調する一九五九年の大久保の記述を挙げておこう¹⁸。

これ〔国史、西洋史、東洋史の垣を取り除いたこと〕によって日本の歴史学ははじめて完全に近代化されて学問として渾一し、学界に独自の領域をもつにいたった。かくして日本史は真に世界史の一環となった。……〔中略〕：明治時代の史学界はまだ群雄割拠の戦国時代であった。これが一個の学問として統一されたのは大正史学である。そして、この意味の史学の統一を完成せしめたのが、昭和七年に東大関係の少壮歴史家によって結成された歴史学研究会あたりであったといえよう。

ここで大久保は、大正デモクラシーのもとで花開いた文

化史学や社会経済史学といった、部門史に限らず歴史の全体を捉えようとした「総合的歴史観」の叢生を、戦国時代から統一国家が形成されるアナロジーを用いて高く評価する。そして田中が注意を促すように、一般在野性（官学アカデミズムとの対抗）が強調されがちな歴史学研究会（歴史研）の結成は、考証史学と在野史学を止揚した大正史学による「史学の統一」の最終局面に位置づけられる。文化史家では西田直二郎や平泉澄、社会経済史派では三浦周行や本庄栄治郎が言及されるように、大久保にとって「大正史学」は官学内革新の現われであり、しかもこうしたいわば「官学Ⅱ歴史同祖論」のモデル・ケースとされるのは初期平泉史学である。考証史学の伝統をふまえつつも、それを乗り越えて「総合的な「精神生活」史」の新境地を開拓した「初期平泉学派」の明治実証史学への「反逆」ぶりを賞賛する流れで、「おもしろいことは、初期平泉史学が蒔いた新しい種がこの初期「歴史」でいろいろと花を咲かせていることです」と発言している。歴史の源流に初期平泉を置いた「平泉Ⅱ歴史同祖論」というべき、見ようによつてはかなりポレミックな見立てである。のちに大久保はマルクス主義史家・服部之総の思い出を楽しそうに聞きつつ、黒板勝美は「服部をもつとスケールを大きくした歴史家（政治家）」だと語ったというが、服部を官学を中心にあつた

黒板になぞらえること自体、諸「史学」の間に友敵関係を読みこまない大久保ならではの発想だろう。

第二の「基礎工作」は、『日本読書新聞』一九四二年一〇月二六日に載つた大久保の学界展望「現代史研究の基礎工作」が示唆的である。大久保は「今日のこの〔現代史の〕大建設期に際して更に現代史の基礎的な調査研究を要望する」とし、とくに各県庁の古記録の保存、文部省の維新史料編纂事業の「明治史編纂」への発展、外務省の「大日本外交文書」編纂等を、国家プロジェクトとして予算をつけて積極的に推進する必要を説いている。「現代日本の把握は、理念の確認を裏附けるに歴史的事実を以てしなければ、やゝもすると理念の遊戯、安価な興奮となる。これを冷静な反省に導くものは現実への沈潜でなければならぬ。」とあるように、戦中の大久保は、「歴史的事実」に基づく「現実への沈潜」という実証主義(positivism)に、「理念の遊戯、安価な興奮」を回避するラディカルな「反省」の契機を認めていた。後述するように、こうした戦中の歴史哲学的考察は大久保史学の骨格となつたと思われる。大久保が「基礎工作」（基礎的な調査研究）の先達として意識する一人が、大正期の「文化史的史風」の「一角にそびえる存在」たる津田左右吉だったのは疑いない。また大久保の用法も同時代で孤立していなかった。京都帝大で文化史の中村直

勝や西田に師事した古代史家・直木孝次郎は、戦後の国史学界の動向をレビューした一九四八年の文章で「日本歴史再建の基礎工作として何よりも必要な原典批判」²⁵と記している。史学史上の「基礎工作」とは、戦中は国民の「冷静な反省」の材料となり、戦後は「歴史再建」の柱となるような時代精神だったのである。そして大久保は、明治史でも「史料学的な基礎工作を確立せしめる」ことが「新鮮卓抜な問題意識の解明」につながると考えていた。²⁶

以上のように、七〇年におよぶ大久保の歴史家としての歩みにおいて、「史学の統一」と現代史の「基礎工作」という二つの契機がその歴史叙述においてどのように準備され、独自の実証主義として結晶・展開していったかは、史学思想史の未知の課題を照射する。本稿はそうした問いを貫戦史的に考察する作業の一環として、大久保が学問的自己確立を遂げた戦前（一九二二—一九四五）に注目する。大久保は、戦前は近代史研究が草創期だったため経済史、政治史、思想史の人々が「諸派いり乱れ」て参入し、「自然と国史畑からはみ出た仕事をやるようになった」とボジティブに語る反面、「政治史の本道」²⁸といった文学部系歴史研究の正統派の自負もときに覗かせた。以下はそうした大久保の越境と望郷の往復が、歴史学の外延の（再）設定にもつた意味を跡づける作業ともなるだろう。

一 京都からの「新しい歴史学」

大久保は一九二二年に京都帝国大学経済学部に進学するも、在学三年で病気により退学し、二六年に東京帝国大学国史学科に入学している。京大を選んだのは学習院高等科時代に河上肇に憧れを抱いたためである。「新しき村」運動の武者小路実篤とも共通する、第一次大戦後の大きな社会的変動に実践的に働きかけていく河上の「求道者的」な「エートス」に惹きつけられたのである。²⁹ただ、その後の国史への転換を準備しただろう、若き日の京都時代について知りうることは少ない。大久保は回顧で、京大を選んだ理由として河上の他に西田幾多郎や三浦周行にも言及しているものの、「軽いノイローゼ」³⁰でろくに講義に出なかつたこと、憧れの河上も路上で時おり見かけた程度で、河上以外に「とくに影響をうけたというひともしません」と振り返る。³⁰しかし語られないこの三年間が、回顧の見出しにある「経済学を志す」に収まっていたかはやや疑問がある。結論を先取りすれば、大久保史学の形成過程の理解には、黒板・平泉以前の（または近代史研究の出発点となったという『東京帝国大学五十年史』以前の）京都要因の検討が必要だと筆者は考えている。

たとえば、大久保は一九二四年一月から三月の間に、三

浦周行を「紹介者」として京大文学部の史学研究会に入会している（『史林』九一一）。実際にどれほどコミットしたかは不明だが、少なくとも他学部の国史学科と何らかの形で接触し、紹介してくれる程度の関係性を三〇歳年上の三浦と築いたことは確かである。さらに東京に拠点を移した一九二六年にも、東京在住の田山信郎（方南^①）、岡田實、井手一馬の入会時の紹介者となっている（『史林』一一一三・四、一一一一）。当時、東京の少なからぬ有力歴史家が史学研究会に属していた。大久保はその経歴から、東西の若手歴史家を架橋する役割も担ったのだろう。

京都の学問の先進性や先端性は、大久保がしばしば言及していたところである。大正文化史学についても、原勝郎、坂口昂、三浦周行、西田直二郎のような仕事は「東大の土壌からは〔平泉史学の登場まで〕生れなかつたもの」と述べ、また「在野の大家」である幸田露伴、内藤湖南、西村天囚（講師）を招聘した柔軟さにも注目している。服部之総たちとの鼎談でも、同じ「官学」でも東大より自由な京大の気風を強調し、総長選挙をはじめ「新しいやりかたはみな京大がイニシアチブをとっている」とまで断言している。この「新しいやりかた」には、一九二五年、明治維新史の講義を日本ではじめて実施したのが京大文学部だったことへの感慨^②も含まれていたと思われる。

大久保の紹介者となった三浦もまた「新しい歴史学」を体現する存在だった。一九一六年から内田銀蔵を継承する形で「日本社会史」の講義をいち早く行ない、米騒動など同時代の社会問題を背景に、当初の中世日本の法制史および古文書学から、社会史、経済史、文化史、そして近世史・近代史まで研究対象を広げていったのである。^③ 第一次大戦後に東北・九州両帝大の法文学部が文化史学の専門講座を設けたような当時の文化史ブームにはやや距離を置きつつも、三浦は（黒板勝美とともに）官学アカデミズムの内部から、第一世代とは異なる、時代の社会秩序や経済生活の全体を捉えようとする歴史叙述の先駆者となっていく。しかも三浦型の「文化史的総合」が接近する「時代精神」においては、平泉や西田らのような後統世代の人格主義者と異なり、精神世界（思想史や哲学）のみならず物質世界の歴史（社会経済史）も対象となる。ここから、京都を震源とする複数の歴史叙述の潮流が生じる。

第一に、大久保が京大に在籍した一九二〇年代前半に生じた、「社会史」の対象——社会階級間の経済問題に置くか、経済上の利害に還元されない伝統や感情といった人間の社会意識を重視するか——をめぐる本庄栄治郎（経済学部）と喜田貞吉（国史）の論争^④を内包しつつ、一九三〇年二月の社会経済史学会の創立につながっていく潮流である。

この論争については、大久保が二九年五月、東大国史の早熟な同期だった小野均（晃嗣）が卒論を元に刊行した『近世城下町の研究』（至文堂、一九二八）への長い新聞書評で、「社会史経済史的研究」が近年盛んになる中で近世都市を「深く」論じた本書の重要性を強調し、この主題を閑却しがちだった「我国史学界」での先達として三浦や喜田の業績に言及していることが、参考になるかもしれない。³³ 続いて社会経済史学会創立前後にも、東大経済学部の中野喬雄が歴史理論と史料考証を統一する観点から、後者の中立性のみを評価しがちな本庄を批判し、本庄の「学統」³⁴を継ぐ黒正巖との論争が（日本資本主義論争に先立ち）発生する。³⁵ 大久保は戦前に『社会経済史学』に論文を複数回載せており、また一九六〇年代にも所属学会欄の回答で「社会経済史学会評議員、蘭学資料研究会理事」の二つのみ記すなど、社会経済史学会と長く関係を保っており、（本庄らとともに）創設メンバーだった土屋とも戦前から親しかった。要するに社会経済史の揺籃期に生じた二つの論争につき、大久保は、歴史叙述に経済史以外の文脈も組みこむ点では内田―三浦―喜田と近く、また実証主義に歴史理論も組みこむ点では土屋と近かったのである。

第二に、三浦の「文化史的総合」が法制史学と社会経済史学の合流を促し、やがて東京と連動した近代史研究の萌

芽を生みだしていく潮流がある。ここでも、法制史において法学の一分野として西洋／日本法制史に接近した中田薫と対照的に、³⁶ 国史の広がりを探る三浦の文化史的な個性が作用したと思われる。キーパーソンの一人は社会経済史学会の創立にも関わった法学部の法制史家・牧健二であり、史学研究会でも一九二九年二月一九日、三浦と牧を中心に「明治史研究会」が発足する（『史林』一四―二）。研究会はその後、三二年九月の三浦の死を経て、三二年五月二三日の第二回例会をもって解散している（『史林』一七―三）。会の発足のおそらく契機となった、明治維新六〇周年を意識して明治史をテーマにした一九二六年二月の読史会大会でも、明治史をとりあげることに冷ややかな西田との距離感³⁷は否めず、東京の明治文化研究会のような持続は難しかったのかもしれない。この読史会については、京大での明治維新史の初代講師だった藤井甚太郎が明治文化研究会の二七年一月例会で「京都大学の明治史講演会」と題して紹介しており、また三浦も同年一月に「明治密偵史」を報告していた。³⁸ もちろん大久保の明治文化研究会への参加は一九三五年頃からであり、京大「明治史研究会」については、史学研究会会員とはいえ接点があったかは微妙なところである。ただ京大の頃すでに、明治文化研究会が二五年二月創刊した月刊誌『新旧時代』を、本屋で

「史学統一」の夢（前田）

買って読むことがあったという。

その後、一九三七年四月から六月に、西田直二郎門下の徳重浅吉の紹介で大久保が史学研究会に「入会」した記録がある（『史林』二二―二三）。とすると、名前が最後に確認できる二七年一月以降に一度退会し、再入会したことになるが、退会記事が残っていないため詳細はわからない。三浦の死や明治史研究会の終焉があるいは影響したのかもしれない。いずれにせよ、不安な体調で経済学部を置きつつ、史学研究会にも出入りしていた京大時代の学部横断的な人脈や読書、その延長にある近代史の諸潮流との出会いは、大久保が東大国史で二六―二七年に受講した中村勝麻呂の幻の「幕末史」講義に回収されない広がりを持っていたのではないだろうか。なお、大久保は京大経済で受講した、河上の親友で本庄の兄弟子でもあった河田嗣郎の「社会政策 特殊講義」の筆記ノートの、通常は復習用に空けられる見開き左側のスペースに、おそらく三〇年後の一九五〇年代になって、自らの「明治文化史」の講義の章立ての構想を書きこんでいる。日本近代史の自分なりの体系を模索する過程で京都時代の記憶を手繰り寄せていたようにも、推測されるのである。

実際、京大から東大への再入学をめぐる大久保の回顧には、いささか相反する評価が混在している。たとえば伊藤

隆から「東大国史と京大の経済では、だいぶ雰囲気の違いますか？」と問われたとき、大久保は「違いましたね。…（中略）…なんだか故郷に帰ったような気持ちでした。ここが自分の安住の地だという感じだった。」とまで述べ、国史研究室の学年の違いを越えた紐帯が「嬉しくてたまらなかった」ゆえんを高揚気味に語っている。しかし、その同じ回顧では、「故郷」の住人について「その頃の国史科の学生には、土台、近・現代史意識というようなものが、ほとんどなかった。つまり、歴史は考古学だった。」と違和感があったことを漏らし（「考古学」とは大久保なりの婉曲ながら強い批判だろう）、別の回顧でも大正末期の東大の歴史学の雰囲気は、喜田貞吉や吉田東伍のような「歴史地理学会の学風みたいな実証的な古い感じのもの」で、そこでは城跡のような「まったく昔の話ばかり」が話題とされ、明治維新以降を歴史家がとりあげないことは「鉄則」で、「現代の問題と関連させて歴史を見るという視点」はほとんどなく、「あくまで現代と切り離れた古代であり、中世であり、そして江戸時代」が研究されていたと、むしろ閉塞感が強調されている。そしてそこに「国史学科の史風を革新」した平泉澄が「秀才」ながら「型破り」な講義スタイルで颯爽と現れ、一九二六年に『中世に於ける社寺と社会との関係』と『中世に於ける精神生活』を相次ぎ出版する

と、「私たち〔東大国史の〕学生は争って読んだものです。」と、平泉史学の「新風」性が印象づけられる語りの構造となつてゐるのである。⁵⁵⁾

筆者は、「安住の地」を発見した喜びと「古い感じのもの」への失望とは整合的に解釈されるべきだと考えるが、まず後者に二つの内容が含まれてゐることに注意したい。ここで問題にされているのは、近・現代史が歴史研究の対象とされないことに加えて、古代史・中世史・近世史研究が「現代の問題と関連」することなく、すなわち大久保の独特の用語を借りれば、「現在或いは自己を中心とする独自の世界観、或は世界把持の方法」としての「現代史」の観点（それは歴史家の「現代意識」の産物である以上、多様な「現代史」が成立しうる）を欠いたまま、いわば「考古学」的のみ研究されている事態も含んでゐる。⁵⁶⁾古代史であれ、中世史であれ、「現代史」と地続きの叙述をなしうるのであり、京都からの文化史学の台頭に感応した平泉中世史学はそうしたアクチュアリティを感じさせるものだったといえよう。大久保は平泉の指導のもと一九二八年に武田信玄の経済政策に関する卒業論文「戦国諸侯の政策に於ける近世的傾向」を書き上げているが、そこでは、江戸時代に甲府を江戸、若松、静岡などとならぶ城下町へと発展させた信玄の「都市経営」を、「近世都市の先駆」と高

く評価している。⁵⁷⁾「都市経営」は同時代の大阪や東京における大都市市政を強く想起させる言葉である。回顧録では史料編纂官の渡辺世祐の協力が記されるだけだが、こうした現代的な概念をいささか自由に前近代の歴史叙述に用いる点でも、また「無節操不規律」に見えるようでも各地では近世の統一を支える凝集性が胚胎しつつあるという戦国時代理解の点でも、大久保の視点は三浦周行の「戦国時代の国民議會」（一九二二——「国民議會」とは山城国一揆のことである）と近接している。それだけに、東大国史の二つの意味での「現代史」ばなれば、物足りなく感じたのではないだろうか。

また、「京都史学」の影が回想にほとんど現われない背景には、自らのアイデンティティの核（「故郷」）となつていく東大国史時代とのコントラストを強調したい心理が、無意識に働いていたようにも思われる。そのような大久保の「故郷」の再発見と「現代史」への転回を準備させた一つの要因として、関東大震災があつた可能性をここでは指摘しておきたい。大久保の大正史理解のなかで震災の占めるインパクトは意外なほど大きく、東京の下町の壊滅や大学構内の焼失をふまえて「あれ〔震災〕がまあ大正の一つの大きな転換期が、政治的にも文化的にも転換期で」とのちに述懐している。⁵⁸⁾とくに明治文化研究会の結成が震災の

翌年であったことに大久保は注目し、大正政変以来のデモクラシーへの転換を決定的にした象徴的な出来事と位置づける——「大正政変からだんだん培われて、吉野（作造）さんたちが行ったことが、震災でちよつと板に付いて、それが具体化した」。明治文化研究会が機関誌のタイトルを「新旧時代」としたように、旧世界たる「明治」は震災で壊滅し、歴史研究の対象となり、新世界たる「大正」がここにはじまるといった断層を、大久保も震災に見出したのである。大久保の大正・昭和期の歴史叙述はついに書かれなかったが、それでも震災が「いろいろの意味で時期転換の動因」だとされているのは印象深い。震災はまた、東大の再編の契機となった。文学部本館が焼失したため郊外移転も検討される中、最終的には本館を本郷で再建し、かつ国史研究室を東洋史、西洋史の各研究室とともに新設する方針が定まる。これは国史においては、史料編纂所からの独立であった。そのため編纂所の辻善之助は分離独立に反対したが、結局押しきられる。そこには、まだ教授会に出席資格のない講師だったものの、平泉の強い意向が反映されていたようである。学内の膨大な蔵書を灰燼に帰した震災は、国史研究室が明治以来の体制から自立する条件も提供した。大久保が京都からやってきたのは、まさにそうした流動期だったのである。

二 黒板・平泉から「憲政史派」へ

大久保が一九二〇年代後半ごろの東京帝大国史科の教授陣を、史料編纂掛系統のいわば本流である「辻系」（重野安繹—三上参次—辻善之助）と、古文書学系統の「野党」でより奔放な「黒板系」（久米邦武—黒板勝美）に分けて回想していることについて、中世史家の石井進は、①古文書学は明治のアカデミーでむしろ「史料学樹立の要」と意識された重要な課題だったこと、②また黒板は久米と直接の師弟関係はなくむしろライヴァル視すらしていたことを挙げて、大久保の理解が正確ではないと指摘している。ただ、こうした不正確さも含む理解はかえって、「官学内野党」ともいべき史学史の系譜に自らとその先行者を位置づきたい、大久保の選好を映しだしていると思われる。たとえば大久保は黒板が『国史大系』全巻を完結させる際、田口卯吉の事業を継承する姿勢を明示したことを「美しい配慮」と呼び、久米のみならず田口も黒板の系譜に加えている。また、太政官修史館で発達してきたような「史料学、史学の実証的調査の用意」に欠ける限界はあるものの、史学史で注目すべきは時代のオーソドックスからの「破格なもの」にあるとし、社会心理から「開化」を説明しようとした田口卯吉の歴史叙述の革新性をほとんど絶賛している。

他方で、田口や久米（―黑板）のカウンターパートとなる重野安禪や三上参次については、とくに重野への敬意は深いものの、やや外在的な印象を受ける。大久保は総じて（官学の内外問わず）野党鼻祖であった。それが鮮明に現われるのは三宅雪嶺論である。大久保は雪嶺の『同時代史』を、政治を軸にしつつも財政、外交、文化、風俗等の問題を「総合」し、文化史的な広がりを用意する「総合的近代史」と高く評価し、史論家としての雪嶺の「民間人的に徹底」した姿勢に共感を隠さない。しかも雪嶺は「どれ一ツとして稀覯な史料を使用」せず、「神経質なほど「官庁の力」を借り」なかったが、大久保はそこに大学の「アカデミックな史学」がたどってきた、「史料による実証という正しさ」から外れてただ新出史料の希少性にだけ依存して「能事終れり」とし、学問が現実から遊離していくのを顧みない姿勢への痛烈な批判を読みとっている。それは「高踏的な考証学」や「歴史学を安易な史料至上主義に陥らしむる貴族主義、ブルジョワ趣味」にほかならず、大久保のみるところ、日本の歴史学の「恐るべき病痕」なのである。山路愛山とともに（蘇峰とは異なり）「貴族的史料主義」と闘う「デモクラティックな学風」の系譜に位置づけられる雪嶺の史論を、大久保は単に「古典的な超絶性」を見出すのではなく、「今後の歴史学界に対して深い暗示を与えるもの」として

受容する必要を説いている。考証学や史料至上主義と区別される「史料による実証の正しさ」の存立条件（それはこゝと戦後の「アカデミックな史学」が忘却してしまった「辻系」の精神でもあるのだろうか）がややわかりにくいものの、大久保が通俗的な実証主義の範疇に収まらない歴史家であること、また同時に史料に基づいて歴史を書くという営みに、現実働きかけて社会の「デモクラティック」を増大するような、強烈な実践的使命を託していることは明らかだろう。このような「民主化」と「実践」の学としての史学像に照らしたとき、明治末に南北朝正閏論争と大逆事件を通過した黑板が、国立古文書館の創立によって史料収集・保存とその公衆への公開によって天皇制下の歴史研究を変えていこうとしたようなラディカリズム（原則的な公開が民主主義国の規範となった今日忘れられがちであるが）、戦後において最も継承したのが大久保だったといえるかもしれない。

しかし、黑板本人を限りなく尊敬し、またその在野性への感度から久米や田口との連続性を（半ば強引に）見出したにもかかわらず、考証史学と在野史学を止揚する史学史上の役割を与えられたのは平泉であり、史料編纂所の官学アカデミズムへの先行批判者でもあった黑板ではなかった。大久保が黑板の主著『国史の研究』の初版（一九〇八）

に「明治の国史学」の到達点として愛着を示す（『著作集』七、一〇七頁）のも、おそらくこの点に関わっている。『国史の研究』は一九一三年、一九三一年と二度にわたって大きく改訂する過程で、「文化」の概念を多用しはじめていき、第三版ではついに、「文化史」「政治史」に大別していた初版以来の区分を放棄して、政治史を「文化の最も主要なるもの」として文化史のサブシステムに組みこんでいた。このような黒板のいわば「文化論的転回」にもかかわらず、大久保が初版を評価するのはやはり、黒板は「野党」でこそあれ、あくまで平泉以前の「旧」歴史学の最良の部分（大久保のいう「新考証史学」）に配置しなかったのではないだろうか。この点、皇国史観に傾斜する前の平泉史学について、「明治史学の一番いい点の実証主義と大正文化史を合わせたような、私は平泉史学をかなり評価しています」とあるのが示唆的である。一九三〇年代に顕著となる周知の変貌を遂げた平泉本人から「破門」された自認を持ちつつも、大久保はなお呪われた恩師とのベル・エポックを長く大切にしていたようである。

もつとも、すでにみたように、大正文化史学は大久保はデモクラシーを促進する役割を見ていた。「歴史を大学の研究室からひろく解放するという大衆性」や、「専門知識の民主化」がそこでは重視され、さらに既成権威からの解

放の点で大正を代表するものとして、東洋史から史料に基づく「自由批判」の精神を輸入した、津田左右吉の一連の日本古代史研究を挙げている。この「大衆性」や「民主化」の側面に関する限り、京都史学や平泉史学以上に大久保に決定的な影響を与えたといえるのが、第一に津田であり、第二に尾佐竹猛をはじめとする「憲政史派」である。実は大久保も学習院高等科時代、和辻哲郎と津田の仕事に学んで自らの『古事記』論を構想していた。一九一八―一九年頃に津田の『神代史の新しい研究』（一九一三）を手にとったようであり、また主著『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（一九一六―二二）は赤線を引いて読み「非常に感銘をうけました」、後年に『支那思想と日本』（一九三八）も「愛読感銘しました」と述懐している。

津田の仕事も、京都史学や平泉ほどそのイメージが膾炙しているわけではないが、史学史上の文化史や精神史の潮流に明確に即したものである。たとえば津田はゲオルク・ブランデス『十九世紀文学における主要思潮』に刺戟を受け『我が国民思想の研究』を執筆しているが、この主著に丸山眞男は「ヨーロッパの、それもヨーロッパ大陸の文化史 (Kulturgegeschichte) あるいは精神史 (Geistesgeschichte) の伝統」の継受を認めている。また津田本人も戦間期に、自らの仕事を「純然たる芸術批評の

立場」と異なる「文化史的研究の立場」と位置づけていた。⁷⁶⁾ 実際、二〇世紀転換期のドイツにおけるマックス・ウェーバー、ゲオルク・ジンメル、エルンスト・カッシーラーらの「歴史的文化科学」(Historische Kulturwissenschaft)への着目は、学問の主要な対象を「国家」から「文化」に移行させるとともに、(国家も含めた)「文化」を「人間の生のあらゆる領域での思考形式、行動、制度形成の不断の相互的絡み合い」として再解釈する視点を提供し、やがて歴史学に波及していく。⁷⁷⁾ こうした文化史・精神史の知的文脈を津田がふまえていた以上、津田批判の「英雄時代」論を戦後に著したマルクス主義史家・石母田正が、「旧歴史学最後の拠点」たる「精神史」に唯物史観貫徹の目標を定めたのは、⁷⁸⁾ けだし精確だったのである。なお大久保はやはり津田についても、「修史館から東大へのアカデミズムの編年史・「大日本史料」的考証史学」と対照的な、⁷⁹⁾ 久米―吉田東伍という早稲田の在野史学の系譜に連ねている。

対し、東洋史(白鳥庫吉や津田左右吉)のみが「獨創性を發揮できた」、「日本の歴史学者の腕の振り場所でした」と発言している。続けて、歴史の各分野の専門化の進行が専門外への無関心を伴うことを批判し「日本歴史でも、私は近代ですから……これでは困るのです。」と嘆じているように、⁸⁰⁾ 大久保は世界の一体化が進む「近代」を自身が研究する以上、地域や分野を越境することは不可避だと考えていた。文学をも歴史学の射程に収め、⁸¹⁾ 国史や西洋史の垣根を意に介さず「獨創性」を發揮した津田の歴史叙述に、「基礎工作」者のロール・モデルを見出していたのである。それだけに、大久保が後年に津田に示す不満も、この開放性の評価に淵源すると思われる。一九六三年の津田論で、大久保は、津田が過去と現在の日本人の生活に内在した「未来への創造の指導原理」として人間の「生の自律性」を強調することに一定の共感を示す一方で、津田が「歴史的発展の普遍的法則性」を「極端に拒否」し、国民生活の「気分、欲求、心情」に寄り添うことで、あくまで日本個別の文脈で「歴史的必然性」を立証しようとすることは方法的恣意を免れないとする。そしてコスモポリタニズムの観点から、津田が各民族の特殊性という「歴史のたて割に固執」するあまり世界史の「横のつながり」を軽視し、「人類社会に共通する文化の発展段階や階級構成」を否定する傾向にあ

る点を、日本を論じてても近代を論じえないときびしく斥けるのである。こうした普遍主義的価値観を前提に、大正期の大久保は、文化史のうち物質世界は社会経済史派、精神世界は平泉と津田の影響を受けつつ、現代日本のデモクラシーの発展に貢献し、その必然性を立証しうる実証主義二・〇の方向性を、様々に模索していたといえよう。

以上のような史学史のいわば「裏街道」たる文化史の文脈に対し、大久保の学問形成に関わる「表街道」の文脈というべきが、『東京帝国大学五十年史』、『帝国学士院六十年史』、貴族院五十年史編纂会、衆議院憲政史編纂会（大久保は非委員）などの、『大日本編年史』以来の官学アカデミズム史学の流れをくむ昭和戦前期の各種編纂事業である。ここでは、両院の五十年史で委員長を務めた尾佐竹猛のもとでの歴史編纂の態勢を、大久保が「衆・貴両院の純官選事業でありながら、編集委員は官学派ではなく純在野派」であり、これら編纂会が「戦後の近代政治史研究へのつながりを持っていた」と誇りをもって振り返られていることにまず注目しておきたい。「日本憲政史の体系を樹立」し「オーソドックスな近代政治史専門家のいわば先駆」となった「尾佐竹一派」のスタツフのうち、大久保はとくに東大出身者ではない渡辺幾治郎・深谷博治・鈴木安蔵の三人が思想の違いを越えて親しい間柄にあったことを懐かし

そうに語っている。折り目正しい「純官選事業」がマルクス主義者も含めた「純在野派」の力量で可能になったというある種の逆説を、痛快に感じるような心理をここから読み取れないだろうか。大久保が指摘するように「尾佐竹一派」のプロトタイプとなったのが明治文化研究会である。同会について大久保は、「明治時代の官学歴史学が見むきもしなかつた紙屑」を収集することで「新しい国民史的資料調査の成果集」を刊行し、「明治を葬って、政治、社会、思想、風俗にわたった広汎な価値観の大転換をもたらした。」とその歴史的な役割に賛辞を惜しまない。とくに歴史叙述としては、明治文化研究会こそが「明治時代を過去として顧み、学問的に整理する最初の試み」を行ったのであり、吉野作造の民本主義を反映させた尾佐竹の明治憲政史は、「明治立憲制の由来」を歴史的にたどることで、公議輿論重視の風潮が生起してくる「必然性」を「幕末の変質過程」から解き明かそうとしたまさに「大正デモクラシーの政治史観」である。吉野と尾佐竹の貢献はさらに、藩閥史観のオルタナティブを積極的に提示したことにある。彼ら二人は「藩閥・軍閥によってゆがめられた明治憲法を本来の軌道にかえすという学問意識のもとに明治憲法成立史の再検討を企てた」のであり、「その学風は憲政史派と呼ぶ」に値する。時代に即した史論の分裂と競合を歓迎す

る大久保の姿勢がここにもよく現われている。

そしてこの明治文化研究会の「左」の「血液」は、大久保のみるところ、憲政史編纂会を経由して、戦後の国立国会図書館憲政資料室にまで流れこんでいる。日本国憲法下の国民主権原理を象徴する憲政資料室は、「憲政研究の自由化と促進」を目的とする点で、「ひろく国民への憲政知識の啓蒙」を目的とした憲政記念館とともに、「戦後の政治革新の産物」にほかならない。これを支えた戦前「憲政史派」の精神を戦後にも再生すべく、大久保は木村毅らとともに一九五九年から六三年に『明治文化史料叢書』全一二巻を刊行し、吉野・尾佐竹らの『明治文化全集』の「姉妹篇」・「跡継ぎ」にしようとした。

吉野・尾佐竹の在野性の重みについては、大久保がある回顧で、憲政史編纂会の中心がもし尾佐竹ではなく藤井甚太郎さんだったら、という反実仮想について「言っちゃ悪いけれども、…〔中略〕…もつと集め方が違い、オーソドックスな、あるいは明治の上層部の政治家の史料ばかりに集中していただろうと思います。」と否定的なシナリオを述べているのが参考になるだろう。尾佐竹だからこそ「上層部の政治家の史料」にとどまらない収集範囲の広がりを持つことができた指摘しているのである。もつとも、エリートたちの政治史を大久保が一概に否定しているわけ

はない。むしろ、興味深いのは、渡辺や深谷のような、戦後の実証研究の先駆となった「政治史の正道」たる「オーソドックスな近代政治史専門家」と、「素人上りの」尾佐竹のあいだに、大久保が一定の断絶を認め、前者をエンパワーしていることである。たとえば「尾佐竹史学の史料主義に対しては史料の扱い方にほくは多大の疑問を感じるのです」と発言する一方で、渡辺や深谷の「アカデミックな実証主義的研究」については「今は全く省みられないんですが」「戦後、今度は民権運動が盛んになって黙殺されちゃったけど、」とその再評価を訴える。こうした発言の背後には、渡辺や深谷の研究が、自由民権運動を対象とする「戦後歴史学」的な政治史研究のみならず、一九六〇年代から八〇年代に主流となった政治過程論的な政治史研究でも先行研究としてほぼ参照されなくなったことへの、大久保なりの寂寞感が反映されているように思われる。深谷が一九四一年に著した主著『華土族秩禄処分研究』の新訂版を戦後刊行（吉川弘文館、一九七三）した際、戦時中の初版の序文をそのまま残したことに触れて、大久保は「戦後に対面した深谷君の自己懺悔みたいなものではないですかね。私は友人の一人としてそう見ているのです。」と漏らしている。大久保と深谷の親しい関係は戦後も続いた。その集大成は、作家・大佛次郎が一九六五年から七三年に

『天皇の世紀』を準備していたときのエピソードだろう。大佛は執筆にあたって、早稲田大学が所蔵する明治天皇紀編纂時の写本史料一〇〇点⁽⁸⁾を朝日新聞社経由で借り出したものの、未完のまま絶筆となったが、このとき、『天皇の世紀』のスタッフというか、いわばブレイン⁽⁹⁾を務めたのがほかならぬ大久保、深谷、そして早稲田で深谷の同僚だった洞富雄の三人だった。大佛が書いた原稿すべてに大久保らは目を通したという。『天皇の世紀』刊行から数年後の深谷の葬儀で、大久保は故人の「史友」として「深谷史学」について話している⁽¹⁰⁾。

ところで、明治文化研究会—憲政史編纂会（／貴族院五十年史編纂掛）—憲政資料室、という「憲政史派」の「血液」が強調されるいまひとつの理由は、一九二〇年代末からの急速なマルクス主義歴史学の台頭だろう。国史研究室で大久保の一学年上で、カリスマの理論家だった羽仁五郎の「反歴史主義批判」（『史学雑誌』三九一六、一九二八⁽¹¹⁾）が示すように、この時点の唯物史観の仮想敵のひとつは文化史・精神史的な歴史叙述だった。羽仁は以下のように唯物史観を正当化する。すなわち文化史、精神史とともに、一九世紀に完成した文献学的歴史のアンチテーゼとして登場してきたが、前者は対象領域の拡大が無限に進んで相互連関を失ってしまい、芸術による総合の試みも結局は芸術であっ

て、歴史ではなくなっている。また精神（主義）に総合の原理を求める精神史も、先行する教会史における神の代わりに人格を、神の国の代わりに祖国を設定することで普遍性を失ってしまった。いずれも、非歴史的なものに頼る反歴史主義である。といって歴史的使命を終えた一九世紀の文献学に戻るわけにいかない以上、我々は新しい歴史的存在に転回しなければならぬ——。大正デモクラシーの維新史観に取って代わるかかる問題提起が現われたことに、大久保は一定の歴史的必然性と正当性を認めている。唯物史観は、これに先立つ社会経済史観と並んで、大正末期からの「日本資本主義の危機の反映であることが銘記されるべき」であり、いかにコミンテルンの息がかかっていたとしても、その主張には相応の説得力があるとす。大久保は一方で、明治文化研究会こそが、マルクス主義史学の明治史研究に「社会的、民衆史的の基礎史料を提供」したのだと牽制も忘れないが、文化史学と文化史家が世界恐慌とその後の戦争で大きな傷を負ったことも確かだった。

大久保は史体の歴史の変遷を概観した一九六五年の文章で、ポスト文化史の社会経済史・唯物史観の登場で史体が一変するものの、「現代史学」の問題は石母田正編の『日本史学史』（一九五七）に譲るとしているが、当の石母田は文化史を次のように裁断している⁽¹²⁾。

文化史学は細分化された歴史の諸部門を、「文化」という場で統一しようと試みたが、歴史の発展の物質的・経済的諸条件の問題を回避し、歴史の基礎を精神的なものにとめたために、はじめから歴史の統一的・全体的な認識において破綻をせめざるを得なかった。同時に一般的・法則的なものに対立して、個別的・一回的なものにたいする偏愛につらぬかれていたことももちろんである。また明治以来の歴史学の研究成果は、かかる文化史学の理論によってかんとんに「統一」することができないほどすでに蓄積されてきていた。

もつとも、文化史学と（講座派マルクス主義的な）社会経済史学の分断が運命づけられていたわけではなく、両者には均衡可能性もありえたかもしれない。ただ戦中の国家主義的言動と相俟って、文化史学への不満はマルクス主義者に限られなかった。すでに戦前期から西田のような文化史学に対する「印象批評」^⑩との批判は生じており、京大国史では戦後に（「西田直系」を標榜する高取正男を除いて）西田の遺産が一扫されることになる。また、やはり戦後に独自の文化史を模索した家永三郎も、一九五七年、大正期の「文化史観」が文化の階級性をオミットした「上部構造」分析に集中したことを批判し、また「文化史観の立場

史苑（第八二巻第一号）

に立つ「日本文化史」ないし「日本精神史」の著者たちが、表面は「天壤無窮史観」の史学者たちとはちがったブルジョワ的ディレッタントイズムを装いながら、太平洋戦争中に狂信的国体史観と五十歩百歩の役割をつとめていた事実を、私たちはよくおぼえている。」と記した。ここで家永の念頭にあったのは「天壤無窮史観」の最前線にいた平泉ではなく、西田（『日本文化史序説』）や和辻哲郎（『日本古代文化』）だったと思われる。

こうした文化史家たちの戦時とそこへの批判が、大久保にどの程度、歴史叙述観の再編を迫るものだったかは不明だが、大久保はまた、唯物史観の登場が史学史にもたらした変化として「史学」と「歴史学」のあいだの微妙な語感の違いに注目している。すなわち、歴研が結成される頃から「史学」にかわって「歴史学」が用いられはじめる。そこには「文化史」にみられるデモクラシーの精神にたいして、「封建史学」以来の非科学性を徹底的に排除し、科学としての歴史の学問的研究を確立せしめようとする意欲がみなぎっていたと大久保は観察する。こうした「大正の史学」に代わる「昭和の歴史学」の浮上は、乗るかそるかは別として、皇国史観のシンボルに引きこまれたつあった「国史」の再定位を迫ることになるだろう。そうした新しい歴史意識の獲得を、戦中の大久保に促すことになった二大卜

ピックこそ、史学史と地方史（郷土史）であった。

三 戦時下の多元的歴史の発見

大久保は一九六五年に上梓した『日本史学入門』のなかで、歴史学がはたすべき「実践」への思いを、次のようにやや切迫した調子で語っている。

とくに歴史学のばあいは社会的実践と結びついていなければ、研究自体が回顧的、趣味的なものにおちてしまう危険性がある。われわれは何のために歴史を学ぶのかという目的意識を、一日も念頭からはなしてはならない。……現実の歴史を推進するのは人間であることにはまちがいない。しかもそれはわれわれ生きた人間である。遠い過去から現在まで歴史の展開は要するに人間の政治的・経済的・文化的実践にほかならない。だから歴史の研究と実践とは離しては考えられないのである。

著者の述べる「実践」のあり方、そして「研究」との結びつき方はかなりわかりにくいのが、歴史研究を「回顧的、趣味的」に墮さない（≠「考古学」化）ためには、「われわれ生きた人間」が、過去に生きた人々のさまざまな領域での「実践」の束を学ぶ（歴史実践（doing history）をする）

ことで、それぞれの生を日々豊かにしていく（研究者であればより豊かな歴史叙述をうみだす）ような循環を著者は期待したのではないだろうか。

ここで想起すべきは、「大正史学」が、デモクラシーの時代にふさわしい「歴史観の解放」だったという大久保の指摘である。引用元の趣旨は、文化史学が歴史を「瑣末な専門技術的考証から解放」して民衆に親しめるものにしたことと、そのことで明治の「正統史学」も「歴史の総合的把握」を展開することができ、「真に近代史学として確立」したことを、相即的な新現象として捉えたものである。「歴史観の解放」についても「決して通俗化でなく専門的研究の民衆化」とあるように、優れた「正統史学」の研究成果を民衆がようやく理解できるようになったといった、やや受動的で、参加の契機に乏しい印象を抱かせなくもない。しかし、大久保の世界観に即して敷衍すると、「歴史観の解放」とは、専門家の仕事が民衆に浸透するとか、支配的なイデオロギーから脱却するという話ではなく、歴史研究者に触発されつつも、市政の人々が己の歴史意識をそれぞれ（歴史実践によつて）磨いていくことで、多元的な歴史世界が成立するという展望にあったように思われる。

たとえば、以下の太平洋戦争中に発表された文章は、そうした歴史叙述／実践を通じた民主化というべき大久保の

ユニークな構想を、率直に示している。⁽¹⁰⁾

歴史は決して限られた、歴史家の歴史でなく、万人の歴史でなければならぬ。すべての人々が歴史を体得することが必要なのである。歴史を体得することによって人は始めて人たり得ると言ふことが出来るのであらう。即ち人の世の真も、善も、美も、すべて歴史の世界に置かれて、始めて永遠の価値が与へられる。：「中略」：帰するところ、歴史の世界は真の世界であり、善の世界であると共に、又美の世界でなければならぬ。

歴史を「歴史家の歴史」から「万人の歴史」に解放しなければならず、また真・善・美を備えた歴史を「体得」してはじめて人は人になることができる。そこから「真の八紘の世界」も展望されるものの、なぜここまで歴史に託するものが大きいのだろうか。

この多分に歴史哲学的な色彩の強い論文「歴史に於ける美しさ」の内容は、以下のようなものである。大久保はまず、歴史と文学の関係を軸に、古代以来の日本の歴史叙述の歴史を概観する。歴史は最初、物語・叙事詩として現れた。大久保は古事記を構成する神話を高く評価しつつ、しかし日本書紀以降の六国史では歴史の世界が詩的性格を著しく喪失し、「単なる国家の実録撰修」となって「実用的

な歴史意識」に移行していったとする。これ以降の歴史意識は、「鏡と物語の対立」という構図で整理される。まず鏡の方では、六国史の中絶により、国家ではなく個人を書き手とする大鏡や栄華物語が登場し、末法思想のもと愚管抄、やがて北畠親房の神皇正統記の成立を見る。この間、歴史は「道理」から「正理」へ、しかも神代からのものとして次第に人々に意識されていく。鏡は「我が心であり、歴史はわれ自らを鞭打つ厳しいものとなつてゐる」。北畠の「濁れる世をもとの正しき姿に返さんとする力強い意志」に基づく歴史叙述にいたると、「正理」という道徳が「歴史を支配する厳格な基準」となり、「歴史は美の世界から、峻厳な道の世界」へいよいよ傾斜する。

もつとも、大久保は「現実を鞭打つ厳しい杖」としての歴史に対抗する系譜として、「世にふる人の有様」をめぐる源氏物語作者の「歴史家的観照の態度」（大久保は紫式部の日本書紀批判に着目する）や、平家物語の「執拗な争鬪の底に横はつてゐる人間武士達の悲しみと喜びが奏でる歴史の世界」を高く評価する。こうした「美しい表現を通して具体的な人間生活を為した歴史」によって、「峻厳な歴史」を相対化しようとする大久保には、歴史実践にも道徳的な要請がせり出してくる同時代の日本への違和感が、刻まれていたのではないだろうか。⁽¹¹⁾ 末尾で大久保は一応「鏡

としての歴史が持つ、鑑戒の力」についても、それが抽象的な道徳の原理ではなく歴史の具体性から出てきたものと付記はするものの、議論の力点は、物語の系譜を擁護し、美しさを喪失した歴史は真の歴史ではない」とする立場にあるように思われる。紫式部が物語の型のうちに「真実の歴史性」を認めたことが真善美の融合の一つの理念型となるように、大久保は「美」と「歴史」の結合を通じて、「善（道徳）」と「歴史」のみの結合を相対化したのであろう。こうした統一性を欠いた道徳的批判や美的観照は、もはや歴史ではなく道徳であり芸術なのである。

この他「歴史に於ける美しさ」論文では、歴史が「一体の運行」として把握されなければならないこと、この「運行」は政治、経済、思想、芸術と諸々の相に現れるため、いずれかの部門史だけでは「歴史は抽象化され、部分化されて、歴史そのものの姿を失」ってしまうこと、「所謂文化史学」や同時代の「新しい意味の政治史」を「歴史の全体性具体性への要求」として肯定的に言及していることなど、いずれも大久保の世界観が窺えて興味深い。一九四二年、藤井甚太郎らと参加した『文藝春秋』の座談会でも、大久保は「歴史そのものの姿」を捉えることの難しさを吐露している。ここでは「今のわれわれの歴史研究の対象」と「いわゆる歴史といふもの」が遊離していることを認め、遊離が研究

の態度に起因すると指摘する。大久保によれば、時代区分や分野別の分業を通じた歴史叙述は、「生きた一体のもの」たる「本当の歴史の姿」を掴むうえで限界を避けえない。

経済史の専門家は、経済史が専門だから思想史や政治史はわからない。ところが実際の歴史は経済だけでも思想だけでもない総てが渾一になつてずつと動いてゐる。ところが若し、経済機構だけを全体から切り離して経済史を考へるとすれば問題になると思ふ。分業的研究、時代分けの研究は常に全体性をハッキリつかんでやらなければ真実の歴史を把握することが出来ない。：〔中略〕：歴史の真の姿をもう一遍見直して、そこから新しい歴史を学問的に組織してゆく、そのことが必要ぢやないかと思ふのです。

時間も空間も「総て渾一になつてずつと動いてゐる」、有機体的な「真実の歴史」を把握すべく、戦時下の大久保は、非職業的歴史家も担い手とした、多元的な歴史叙述／歴史実践のありようの再現に向かつていったように思われる。

第一は史学史である。大久保に史学史への関心が芽生えたのは、薩藩史研究会（一九三四年結成）の活動で、重野安禎の『重野博士史学論文集』を史学会（三上参次や辻善之助）の協賛を得て刊行（全三巻、一九三八―三九）したことに始まる。同研究会の機関誌『南国史叢』第三号

(一九三八)は大久保が編者の重野特集号であり、論文集の解説となる①「重野博士の史学説に就いて」(『歴史公論』六一四、一九三七)をまず発表している。大久保はこの経験が足がかりに②「島津家編纂皇朝世鑑と明治初期の修史事業」を書き上げ、平泉に評価されて『史学雑誌』(五〇一二、一九三九)に掲載している。その後も一九三九年には③「近世に於ける歴史教育」(史学会編『本邦史学史論叢』下、富山房)、④「自由民権論の復古思想批判」(『歴史教育』四一九)、一九四〇年には⑤「川田剛博士の『外史弁誤』に就いて」上・下(『東洋文化』一八一・一八二)、⑥「明治初年に於ける歴史学と社会学の交渉——近代歴史学形成への一過程として」(『形成』七)、さらに単著の⑦「日本近代史学史」(白揚社、一九四〇)、一九四一年には⑧「文明史の流行」(『明治文化』一四一六)、⑨「日本近代歴史学の成立と発展」(遠藤元男編『日本歴史入門』三笠書房)、一九四二〜四三年には⑩「明治初年の大学校に於ける国学者対漢学者の抗争一件」一〜九(『明治文化』一五七〜一六一四)、⑪「明治史学成立の過程」(『歴史学研究』一〇五)、⑫「西周の歴史観——百學連環に於ける歴史の問題」(『帝國學士院紀事』二一二)と、驚くべきペースで成果を発表しつづけた。この他、一九四三年二月頃には山路愛山に関する談話を聴取するために徳富蘇峰のもとを訪

問し、また同志社の愛山文庫を調査している^⑬。

この間で印象的なのは、大久保のうちにおそらく、日本国内の様々な地方、集団において、各々の歴史を叙述し、実践しているアマチュアへの関心が生じたことである。たとえば、大久保は、内村鑑三や西周のような、通常はあまり「歴史家」と分類されない知識人の営みにも豊かな歴史意識や歴史叙述の可能性を見出す成果を発表している^⑭。また一九三八年には島津家を中心に諸藩の史料を収集しつつ、反藩閥の維新史を構想してきた史談会の最終集会に参加し、大名家の旧臣の関係性が強く残る、明治文化研究会とは対照的な雰囲気^⑮に驚いている。また歴史上の人物としても、島津久光のような政治指導者が史家でもあったこと、幕末の志士が「国史」に深い関心があったことに大久保は注目している。久光は相当な時間と情熱を割いて「鑑戒の具」として修史事業を批評・修正したのであり、政治指導者の未知の一面を史学史の視角から照射するこの発見は、大久保の政治史叙述に他の歴史家にならぬ奥行きをもたらした。いかなるときに個人や集団は歴史を叙述しはじめのかという魅力的な歴史叙述のモードがそれである。このようにプロの歴史家ではない多様な人々の、しかも相互に対立し、ときにかみ合わない歴史叙述を通じたアイデンティティの確認が集積していくことで、やがてその時代と

「史学統一」の夢（前田）

環境に即した「諸民族の文化創造」^⑧と「国民史的史観」^⑨が生まれ、職業的歴史家との正の相互作用から「史学の統一」がなされることを、おそらく大久保は夢見たのであった。一九四〇年の大久保の言を引いておこう。

歴史とは人間社会前進のために絶えず過去に吐き出して行くもので、歴史の学はこれに対する学問的認識である。歴史の見方は小にしては認識者各個人の個性、また大にしては時代がこれを支配する。だから歴史的認識は時代によりさまざまな性格や様式があった、しだいに進化して現代に至っているのである。したがって時代の転換はその見方に力強く反映し、あるいは諸学問の発達もこれを豊かにし、また改造をする。多元的な歴史のありようにむけてもうひとつ浮上してきたのが、地方史である。自治体史編纂に大久保が本格的に関わったのは、一九六七年に『神奈川県史』主任執筆委員兼主任調査委員となつてからだ。恩師の一人・黒板勝美の古文書学を通じた関心は早くからあり、金原左門が鋭く指摘するように「今後、大久保史学を史学史に位置づけるとなると、大久保さんの地方史への眼も視野にいれなければならない。」ことは疑いない。そもそも文化史の祖の一人であるランプレヒトが若き日に「地方史」研究で頭角をあらわし、ライプツィヒ大学を研究拠点に押し上げたよう

に、地方史は文化史と関心が重合する部分がある。日本でも、戦前期に西田直二郎が『京都市史』編纂事業に注力した背景には、「地方史実そのものに独立の研究観点と、人間性との連繫」を設定することで「文化史研究」を「郷土史研究の問題と新たに結び付」ける問題意識があつたことが指摘されている。郷土史と地方史の関係性はいささか複雑であるが、大久保が地方史に傾斜していく背景のひとつには、彼が最も尊敬する歴史家の一人である久米邦武と同様の、地方誌史への関心と歴史地理学への関心が重なる歴史学の型があつたのかもしれない。

戦後においても大久保は、歴史叙述や歴史実践の誇り高い主役として、地方の郷土史家や史料を管理する遺族や関係者への敬意を絶やさなかつたが、こうした地方へのまなざしを方向づけていたのが「明治文化」である。各地には多元的な明治文化が宿っており（典型例として「明治初期文化史上における静岡——静岡の明治文化」〔著作集〕六、初出一九六九）、その再発見という社会的実践にむけた使命感が大久保の熱意を支えていたと思われる。「秋月の町には、秋月党の遺族の家に何か史料など残っておりませんか。秋月党の遺族の家に何か史料など残っておりませんか。あなた達地方史研究の底力こそ、今後における日本史研究の基盤となりましょう。」であるとか、「八王子の蘭学者の史料は忝く、大変珍しいものと思えます。八

王子文化史の分野はまだまだ調べればいろいろの発見されましよう。⁽¹⁰⁾といった各地に残る大久保の書簡からは、彼がいかに（明治）文化史のペースペクティヴで地方史研究に取り組んでいたかが明瞭である。原点の一つは、やはり戦中の一九四四年に日本歴史地理学会編の著作に寄稿した「明治文化と郷土史」であろう。ここで「郷土の現代史」研究の必要を説く大久保の口物は、本章冒頭で引用した二〇年後のそれともよく似ている。

従来所謂郷土史研究の一般的傾向は、稍もすれば回顧的、尚古的であつた。郷土文化の悠久も勿論大なる誇りであるが、更に現代及び将来への力強い関心を忘れては、郷土史研究の使命の一半を忘れたものと言はなければならぬ。

郷土史家（地方史家）はこれからは「回顧的・尚古的」に耽溺すべきではなく、また優れた郷土文化に自足してもいけない。歴史研究を通じて「現代及び将来への力強い関心」を再生産しつづけることが「使命」だからである。また、郷土の研究であつても一地方の歴史に局限されない「日本全体の歴史」や「世界史」といった「全体との関聯」は不可欠である。明治維新によって旧藩時代と異なる集権と統一がなされたのちも、「すべての現象が全体と有機的に結ばれてゐる」趨勢は、世界を一体化させていく。このよう

に世界恐慌で文化史の危機に直面した大久保は、史学史と地方史を通じて、歴史叙述の多元性を支える無数の「明治文化」の担い手を日本列島内に見出すことができた。それは、道徳が歴史に侵入してくる戦時下に大久保がベラリズムを貫いたゆえんでもあつただろう。かつて「今や再び資料主義による基礎的な研究に再出発の時代となつた。公式論的研究の時代去り、具体的な歴史的研究が今後要望せらるゝであらう。」と予告したような、⁽¹¹⁾「公式論的研究」に代わる実証主義という武器こそが、大久保の戦中の「再出発」を可能にしたのである。

おわりに

日本史学史における実証主義の一系譜

以上、本稿では大久保利謙がその独自の「史論」を戦前（一九二二～四五年）にどのように構築してきたのかを、その実証主義的な歴史叙述の模索とそれを取り巻く知的諸文脈の相互作用から検討してきた。第一章では、大久保が学問的な自我を形成する過程において、従来注目されてこなかった京都帝国大学の経験（文化史学や社会経済史学など「新しい歴史学」との出会い）の意味をとりあげた。「現代史の基礎工作」という価値体系の源流は多くこの時期に

あることを確認した。第二章では、震災を経て東大國史に進学した大久保が、その文化史的なパースペクティヴを恩師の黒板・平泉、学習院時代から愛読した津田、さらに明治文化研究会との交流を通じてどのように歴史叙述に反映していったかを論じた。最終的に大久保は、唯物史観との対抗関係も内包した「憲政史派」として自己を定位していくが、まさにその立場から、歴史研究に道徳が侵入してくる戦時下の史学史および地方史（郷土史）への沈潜を第三章では分析した。そこでは、必ずしも専門家に限られない人々の多元的な歴史実践の営みこそが歴史学の基底にあるという発見があったことを指摘した。総じて、四〇代中葉にいたるまでの大久保の軌跡は、実証主義的な史風が想像させる堅実さよりは、はるかに豊かな振幅と冒険、そして開放感に満ちたものであったといえる。民主化と綜合、そして実践の学としての史学像こそ大久保の実証主義の原動力だった。この知見が今後、日本史学史上の「実証主義の解剖」を促進することを期待したい。

田中彰は大久保の歴史叙述の特質を「一言半句もまちがわない引用や細かい論証」とは異なる「洞察的実証」と言い表している。実際大久保は、ある教育史の大家が「政治史的な背景」を捨象して限定的・禁欲的な解釈に終始する姿勢について、前人未踏の「基礎作業」を達成した「史観」

に敬意を示しつつも一定の距離感を覗かせている。大久保がそこに見出す「実証から一步もでない立場」の「堅持」や「史料によって跡づけられる以外の推論的考察は一切行わない方針」は、おそらく歴史叙述の理念型ではなかった。明治史学の成立を論じた一九四二年の『歴史学研究』の論文でも、大久保は表面的に相似した「考証史学」と「近代の実証主義思想」の間の「著しい径庭」を指摘した上で、過去の事実を編年的に羅列する前者が「単なる考証のための考証に陥りやすく」相対論や懷疑論に陥る危険もあること、また重野が自説撤回の条件として、確認する史料の発見を公言していたことの「限界」を記している。その他、修史館が、実際は史実の選択において生じていたはずの「史観、あるいは主観の介入」を認めなかったことへの言及も忘れていない。

もちろん大久保は、明治史学も目的としていた「歴史の客観性」や「史的客観主義」を擁護する点では人後に落ちない。ただその「洞察的実証」とは、史料と実証の関係は相対的なものであり、また歴史叙述にも史観や主観の介入がある程度不可避だという、「史料至上主義」貫徹への断念の感覚にも支えられていたはずである。大正期の通史の序で大久保は、「最も新しい時期の歴史にしても、すでにわかりかねることがあまりにも多い。……歴史の真相とい

うものは、或る程度以上のことになる、とわかるものではない。……歴史の学問とは、要するに、限られた史料と、史的推理、洞察力とによって過去を再構成していく作業にほかならない」と述べている。こうした限界や限定性の自認は、むしろ未公刊史料を渉猟したことで到達しうる地平であるが、同時に、相対的により確かな実証的基盤を築いたからこそ「洞察」や「史的推理」を働かせる歴史家の主体性（それは「確証する史料」で覆うような脆弱なものでありえない）を発揮しうるという希望につながっていたのではないか。「基礎工作」の「工作」にも、どことなく「基礎」と対比される応用的・動態的な含意が感じられ、多少のリスクや後ろめたさを承知で最後は飛躍しなければならぬ歴史家のバランス感覚を表わしていたのかもしれない。それはまた（近代史では）ひとつの史実についても共存・競合する多元的な解釈や歴史叙述がありうるという開かれた世界観と相即的である。かくして学問的な自己確立を遂げた大久保が、史学の「統一」や「総合」の夢を胸に「政治史」研究に傾斜していく過程で、戦後日本のマルクス主義、近代主義、近代化論といった諸「史観」とどのように関わっていったかについては、別稿に委ねたい。

註

- (1) 大久保の近代史の出発点のひとつは教育史だが、後年の回顧では、一九三〇年代前半に発表した諸論文が「私としては教育の社会経済史的考察をねらったつもりだったが、なにか、私は教育史専門みたいになってしまつて……」、また「私は『東京帝国大学五十年史』で近代史に接近したから、まあ文化史でしたね。…〔中略〕…憲政史、政治史方面は正直いってずつと後ですね。」と語っている（大久保利謙「私の近代史研究」『日本歴史』四〇三、一九八一、八〇・八四頁。傍点は前田（次も同じ））。別の回顧では、一九四三年刊の単著『日本の大学』の執筆依頼を喜んで受けた理由として、「わたしはいつのまにか、教育史の専門家みたいになつちやつていたわけですが、しかし、わたしはいわゆる教育史には、あまり興味がなく、政治史あるいは社会史・文化史としての教育史をやりたいかつた。」と述べている（大久保利謙「日本近代史学事始め」岩波新書、一九九六、八二頁）。二つの回顧はやや含意が異なるが、戦前期から「社会経済史」「文化史」「政治史あるいは社会史・文化史」の視座を、狭義の経済・文化・政治現象を対象としない歴史叙述にも貫こうとしていたことが窺える。
- (2) 佐々木克「大久保利謙先生を悼む」『明治維新史学会報』二八、一九九六。遠山茂樹「刊行にあたって」『大久保利謙歴史著作集』全七巻、（吉川弘文館、一九八六・九三、以下『著作集』）一、一頁。
- (3) 田中彰「幕末維新史の研究」（吉川弘文館、一九九六）三五九頁。
- (4) 田中彰「解説」（『著作集』七）四三七頁。また立教大学で大久保の指導のもと一九六〇年代半ばから大久保利通研究を開始した佐々木克は、マルクス主義史学の強い当時の歴史学界では「人民を弾圧した」リッソの評判が非常に悪かつたことに、「先生〔利謙〕なりに不満があつた」と回顧している（奈良大学教授 佐々木克「正義感」〔『ブレジデン』二〇〇九年二月一四日号〕。もっとも遠山茂樹が「先生〔大久保〕がマルクス主義歴史学と一線を劃していた」とはいうまでもない。しかしマルクス主義歴史家の業績を評価し、あるいは親交を結ぶことにこだわりをもたなかつた。」と追悼するように、大久保と「マルクス主義歴史家」の学問的連帯があつたことも見落とすべきではない。遠山「追悼大久保利謙先生——七〇年の業績とその背景」『みずず』四二〇、一九九六、三四頁。
- (5) 田中彰「顧みて、いま」（私家版、一九九九）七八頁も参照。
- (6) 一九六八年に京都で開催され、後藤靖、芝原拓自、遠山茂樹、中村哲、松浦玲が集つた明治維新をめぐるシンポジウムで、田中は明治政府側の歴史編纂の先行研究として大久保の「明治憲法の制定過程と国体論」『歴史地理』八五・一、一九五四に言及した上で、「あまりかえりみられていないと思ふんだけれども」と付け加えている（池田敬正司会『シンポジウム日本歴史15 明治維新』学生社、一九六九、二四頁）。なお田中が大久保史学再評価のきっかけを作つたことは、佐々木克「解説」（『著作集』一）三八九頁で指摘されているが、この再評価は（田中や遠山を除く）「進歩的歴史学」での受容を必ずしも意味しないと思ふれる。
- (7) 伊藤隆「歴史と私」（中公新書、二〇一五）一三頁。伊藤は「書評委員が選んだ92年の収穫3点」『朝日新聞』一九九二年

一二月二〇日朝刊でも、刊行中の『岡義武著作集』を取り上げて、「同じく日本近代史研究の長老の『大久保利謙歴史著作集』全八巻（吉川弘文館、一冊未刊）」と並び、日本近代史研究の最良の成果を読み取ることができると記している。岡と大久保は相並んで『日本近代史研究』の「長老」であり「最良の成果」の生産者なのである。

(8) 井上光貞「東大と下村先生」（故下村富士男先生追悼記念誌刊行会編『故下村富士男先生追悼記念誌』山川出版社、一九七二）三八・四〇頁。井上は東大の近代史研究に「うつつ然たる一大山脈」が根づいたと誇っているが、国史研究室の伊藤隆と高村直助、教養学部の佐藤誠三郎・鳥海靖の四人をとくに挙げてゐる。

(9) もっとも「直接間接学恩を受けた人々」による喜寿記念論集では、「いわゆる大正・昭和期の論稿をまとめる一冊」（由井正臣が寄稿予定だったという）の企画も進行していたが、未完に終わっている（小西四郎「跋」（小西・遠山茂樹編『明治国家の権力と思想』吉川弘文館、一九七九）三四九頁。今井修「大久保利謙『日本近代史学事始め』について」の覚書。佐藤雄基編『明治が歴史になったとき』（勉誠出版、二〇二〇）、一四一頁。或いは同時期に大久保編『演習古文書選 近代編』上・下（吉川弘文館、一九七八）で史料の選定と解説にあたった伊藤、坂野、酒田正敏、白井勝美といった人々が、この幻の下巻の執筆候補者だったのかもしれない。

(10) 政治史は、伊藤の他に、天川晃、加藤陽子、我部政男、小池聖一、佐々木隆、島田洋一、季武嘉也、田浦雅徳、竹山護夫、田中彰、坂野潤治、古川隆久、増田知子、御厨貴、三谷博、森山茂徳という陣容。経済史は、香西泰、高村直助、

原朗、室山義正。

(11) 喜寿記念論集・著作集編集委員会・『日本近代史学事始め』編纂の三つの企画のうち、すべてに関わるのが遠山茂樹、宇野俊一、（喜寿に寄稿できなかったが）由井正臣の三人であり、彼らと（田中以外の）『日本歴史大系』執筆陣は疎遠に思われる。なお、由井にとつて大久保が、藤原彰とともに実質的な指導教員だったことは、由井「後ればせの私の近現代史研究『年報・日本現代史』一二、二〇〇七、一九五頁。

(12) 伊藤隆「憲政資料室と私」『みすず』二七六、一九八三、六一頁。

(13) 鳥海靖「日本近代史研究の歩み」『軍事史学』四六一、二〇一〇）一〇八頁。

(14) 松田宏一郎「政治学者における「明治」の歴史化」佐藤編『明治が歴史になったとき』三二頁。実際には大久保と岡の交流の跡も見出せないが（たとえば岡義武『山県有朋』岩波文庫、二〇一九）七頁、総じて疎遠だった印象は否めない。また（具体的に列挙はしないが）岡の側に比べて、大久保の方が岡の仕事に言及したケースが多い。

(15) 一例として、御厨の『明治国家形成と地方経営』（一九八〇）の「資料・文献リスト」では、大久保の『明治憲法の出来るまで』（一九五六）が「とりわけ注目に値する」一角を占めるものの、通史としては岡義武や稲田正次の評価がより高く、また問題設定の点で特筆されるのは、（大久保が先鞭をつけた）明治一四年政変や憲法制定に関しては永井秀夫の仕事である『明治国家をつくる』（藤原書店、二〇〇七、二九六―二九七頁）。

(16) 松沢裕作「はしがき」（同編『近代日本のヒストリオグラ

「史学統一」の夢（前田）

- フイー』山川出版社、二〇一五）i頁。
- (17) 松沢裕作「コメント」『立教大学日本学研究所年報』一四・一五、(二〇一六)三五頁。
- (18) 中野弘喜「史学の「純正」と「応用」——坪井九馬三にみるアカデミズム史学と自然科学の交錯」松沢編『近代日本のヒストリオグラフィ』一二三—一二四、二四五頁。
- なお、官学アカデミズムに実証性のレッテルを貼りがちな「戦後歴史学」においても、その内部の多様性や複雑さの優れた洞察がなかったわけではない。石母田正「序論」同編『日本史学史』（東京大学出版会、一九五七）七頁。また、戦中から実証主義を自覚的に貫いてきた歴史家の、「何か一種の思想的なバックボーン」に支えられた「暗中模索型」の実証主義」を指摘するのは、「岩井忠熊氏に聞く」『日本史研究』六〇五、(二〇一三)六九頁。
- (19) 前掲、田中「解説」四三七頁。典拠は『著作集』七、六〇頁。傍点は前田。
- (20) 大正史学の担い手は官学系（東大・京大）の歴史家に限られず、文化史では東京商大の三浦新七、社会経済史では慶應の野村兼太郎が「綜合」を掲げたが、大久保は彼らの仕事にあまり言及しない。たとえば西洋史家にとつての大正文化史学が座談会で論題になったとき、「一橋の史学」の三浦に話題が及ぶと、大久保は「あの方は歴史もやられたんですか。」と質問し、「え、ランプレヒトを早く日本に紹介されたのは三浦さんでしょう。」と同席者から驚かされてる（座談会 日本における史学の発達」筑摩書房編集部編『世界の歴史・別巻 世界史の諸問題』（一九六二）二六一頁。野村については、津田秀夫「社会経済史学の成立」前掲、

石母田編『日本史学史』二〇六頁以下を参照。

- (21) 前掲、大久保「私の近代史研究」七二頁。傍点は大久保。
- (22) 松尾章一「憲政資料室とわたし」『みずす』二七六、(一九八三)一〇〇頁。
- (23) 「現代史」の語には体制批判の含意もあったかもしれない。一九三九年発表した「近世に於ける歴史教育」で大久保は、『国史略』、『皇朝史略』、『日本外史』、『国史纂論』等の歴史教育的な意図をもつ史論が「現代史（徳川政治史）」を記述から除いたことを「現代史は批判の外であり、したがって歴史の批判を越えた絶対的な政治の現実」だった点に見出している（『著作集』七、三九〇頁）。「現代史」の不在が歴史書としての限界を招いていると見るのである。なお「現代史」の先駆的事例として、斎藤孝『昭和史学史ノート』（小学館、一九八四）一二四—一二五頁は、一九二九年に羽仁五郎が日本大学夜間部史学科で行った講義に注目している。
- (24) 『著作集』七、一八七—一八八頁。「基礎工作」は必ずしも史料収集に限らない「調査研究」であり、主著を上梓するための隣接分野の基礎的な勉強や、その成果としての単著刊行も含まれる。
- (25) 直木孝次郎「わたしの歴史遍歴」（吉川弘文館、一九九九）一〇三頁。
- (26) 大久保利謙「文書から見た幕末明治初期の政治」『著作集』一、(初出一九六〇)三五三—三五四頁。また大久保は、「幕末維新史の骨組み」もなかった明治期に、政治家の書簡や日記などの原史料と、関係者の談話聴取から伝記を組み立てた勝田孫弥『西郷隆盛伝』全五巻（一九九四—九五）を、伝記にとどまらず「一応幕末・明治初年史の体系を新しく

構成」した点で「維新史研究上、エポックメーカーキングな基礎工作」と高く評価している。同「明治時代における伝記の発達」『著作集』七、(初出一九六四)四三二頁。

(27) 大久保利謙「私の近代史研究(続)」『日本歴史』四〇五、(一九八二)八七—八八頁。また大正期の社会経済学派の台頭を、「史学界の独壇場」を攪乱した「異分子の侵入」と好意的に捉える(『著作集』七、六一頁)のも同様の視点である。

(28) 前掲、大久保「私の近代史研究(続)」六七頁、「尾佐竹(猛)先生のような素人上りの(『政治史』研究)と対比された、渡邊幾治郎や深谷博治の研究への評価であり、大久保はこの系譜が戦後忘れられがちなことに不満を示している。

(29) 大久保利謙「佐幕派論議」(吉川弘文館、一九八六)二四一—二四二頁。

(30) 前掲、大久保『日本近代史学事始め』五五—五八頁。もともと「その頃の京都は、学生を大切にしてくれて、いいところだったですね」と総じて記憶は肯定的である。

(31) 文化財調査と墨蹟研究で知られる田山と大久保は国史研究室での親友で、「平泉(澄)先生から、田山君のあるところ大久保君あり、大久保君のあるところ必ず田山君あり、とひやかされた」という。大久保「方南以前」『田山方南先生華甲記念論文集』(田山方南先生華甲記念会、一九六三)六九二頁。

(32) 前掲、大久保「私の近代史研究」七二頁。なお湖南は、大久保の恩師・黒板が古文書学を兼ねて京都・奈良でおこなった修学旅行に同行したこともあり、「野人」同士の「相許した仲」だったようである。大久保利謙「黒板勝美先生の風格と学問」『古代史学』四九—三、(一九九七)四五頁。

(33) 「座談会 日本の大学——歴史と功罪、官学と私学」『法政』四一七、(一九五五)一四頁。なお京大経済学部では二二年

に本庄栄治郎が担当する経済史講座を(社会政策講座とともに)増設しているが、これも帝国大学で最初のことという。本庄栄治郎「私の思い出」(『本庄栄治郎著作集』一〇、清文堂出版、一九七三)四三七頁。

(34) 「座談会 明治史学の回顧」『日本歴史』一二七、(一九五九)三一頁。これは東大国史出身の藤井甚太郎が、京大文学部長坂口昂の招聘を受けて一九二五年度から四二年度まで「明治維新史講座」を(時に大塚武松と隔年で)担当したことを指している。「藤井教授古稀祝賀晩餐会記事」『法政史学』六、(一九五三)七一—七二・七六—七七頁。安岡昭男「藤井甚太郎先生追悼」『法政史学』一一、(一九五八)一〇・一一五頁。前者の晩餐会には大久保も出席した。

(35) 朝尾直弘「解説」同編、三浦周行『大阪と堺』(岩波書店、一九八四)二五一頁。

(36) 以上、山口道弘「南北朝正閏論争と官学アカデミズム史学の文化史的展開(二・完)」『法政研究』八八—一、(二〇二一)一〇七頁以下。大正文化史学については、山口輝臣「大正時代の『新しい歴史学』」『季刊日本思想史』六七、(二〇〇五)、(二〇一五)、田澤晴子「新しい歴史学」と「我々の文化史学」同「吉野作造と柳田国男」(ミネルヴァ書房、二〇一八)を参照。また大正期の辻善之助の「歴史把握」に「社会史研究の重要な先駆的模範」を見出すのは、佐々木潤之介「解説」(辻「田沼時代」岩波書店、一九八〇)三五—三頁。

(37) 朝尾直弘「解説」三浦周行『国史上の社会問題』(岩波書

「史学統一」の夢（前田）

- 店、一九九〇、初版一九二〇）二〇三―二〇四頁。大久保による本書への言及として、『著作集』七、六一頁も参照。
- (38) 『東京朝日新聞』一九二九年五月一七日期刊。
- (39) 秀村選三「学統を承けて」宇田正・藤田貞一郎編『宮本又次史料館』（思文閣出版、一九八四）一五頁。また、非マルクス主義的な黒正の歴史叙述を「大正から昭和にかけて開花した市民的史学のピーク」と評価するのは、朝尾直弘「紹介 黒正巖『百姓一揆の研究 続篇』（『史林』四三―二、一九六〇）三二三頁。
- (40) 由井常彦・武田晴人編『歴史の立会人―昭和史の中の渋沢敬三』（日本経済評論社、二〇一五）二二八―二三一頁。高嶋修一「日本経済史」という「学統」恒木健太郎・左近幸村編『歴史学の縁取り方』（東京大学出版会、二〇二〇）四四―四七頁。
- (41) 「明治二年京都に於ける小学校の設立に就て（一）」（三・完）『社会経済史学』四―五〇七、（一九三四）、「鉱業史」（『同』一〇―九・一〇、一九四一）。
- (42) 大久保利謙・海老沢有道編『日本史学入門』（廣文社、一九六五）三八九頁。運営に関わる学会に限った可能性は否定できないが、大久保に社会経済史学会での役員経験があるわけではない（社会経済史学会編刊『社会経済史学会五十年の歩み』（一九八四）、一二二頁以下）。年齢もあろうが、有志が結合した時限的な研究会と異なり、学会の運営には距離を保っていたのかもしれない。
- (43) 牧や瀧川政次郎など法制史家の存在感が社会経済史学会の特徴である。なおドイツでも一九世紀末以降の精神諸科学に生じた変動をうけて、経済史学を通じた国制史学の再編がめざされたことは、西川洋一「国制史学の対象と方法」水林彪ほか編『国制史学の対象と方法』（日本評論社、二〇一八）四一―四四頁。
- (44) 瀧川政次郎「日本法制史研究の回顧」『歴史教育』一八一―八、（一九七〇）六頁。瀧川は法制史を（三浦が体現したような）歴史学の一分科とし、「日本法制史は、日本政治史、日本経済史、日本社会史等と相並んで、日本文化史の一部門である」という独特の見解に立っている。
- (45) 入山洋子「資料紹介 西田直二郎日記(2)」『京都大学大文学書館研究紀要』一九、（二〇二一）五六頁。西田は二六年一月一日の日記に、この企画は「明治時代今世人興味を惹く為め也。不相変きわものを覗ふ心ぞうたてし」と書きつけている（八五頁）。
- (46) 田熊渭津子「明治文化研究会例会 講演目録」『國文學』四〇、（一九六六）による。京大関係者では、新村出も二九年例会で「ハリスのことについて」を報告している。
- (47) 前掲、大久保『日本近代史学事始め』八五頁。
- (48) 徳重は大久保の七歳年長、一九二四年に京大國史に入学した維新（思想・宗教・政治）史研究者。『孝明天皇御事績紀』編纂を三浦周行から引き継いだ他、皇紀二六〇〇年記念の『京都府教育史』編纂主任も務めた。前田一郎「徳重浅吉と京都」『社会科学』四八―二、（二〇一八）を参照。
- (49) たとえば大久保は、史学研究会顧問として尽力した新村出（熱田公・顧問新村出博士計、小葉田淳「弔辞」『史林』五〇―六、（一九六七））は、シーボルト研究や西周全集の刊行で交流があった（前掲、大久保「私の近代史研究」八三頁、同『日本近代史学事始め』一一六頁以下）。なお、

西周全集について一九四〇年一月三十一日に佐佐木信綱が新村出に送った書簡(佐佐木朋子編『佐信書簡』(竹柏会心の花、二〇一九)、一五一頁)には、次のようにある。

西(周)先生の集、川出書房にて是非発行したいとの事、大久保「利謙」様にも申上しが、新村「出」様の御承諾を得たしとの話に候。右は先日大久保ぬしよりの話有之、たしか其御返事いたゞき、新村様にも御異存あるましく、岩波との御話もまゞしかと、つまりは西先生の為にいつこよりにてもよく出版さへ出来ればよき事とおもふと答へ候に、河出の先代と相沢翁とが親しかりし云々故早くきめて契約取かはしたし、今一度新村様にたしかめもらひたしとの話につき、くだゞしく申上候次第に候。御同意下され候はゞ、別封電報紙に、カワデニタノマレタシシムラ(河出に頼まれたし新村)と御うち願度、もし何か御差支との事に候はゞ、ジヨウキヨヲマデマテシン(上京まで待て新)と御うち願たく候。

河出書房からの出版(実際は、中央公論社に一度内定も日本評論社に変更)にむけて、大久保が新村の承諾を待つて慎重に動いていたことが窺える。なお、新村出記念財団重山文庫には、大久保の新村宛書簡一三通が残されている。大久保の元にも、おそらく本件をめぐる一九四〇年前後の新村からの書簡が一定量残されていたという(小関昌男「大久保利謙先生をかこんで」『史苑』六二―一二、(二〇〇二)、一三三頁)。

(50) 前掲、大久保「私の近代史研究」七五頁。同『日本近代史学事始め』六六頁。

史苑(第八二卷第一号)

(51) 佐藤雄基「大久保利武・利謙父子の学問形成と蔵書」佐藤編『明治が政治になったとき』一六九頁。

(52) 前掲、大久保「私の近代史研究」七一頁。

(53) もっとも、日本歴史地理学会は元来、初等・中等教員で在野の歴史研究者を多く会員に抱えていたこともあり、古代史偏重を改めて現代史をとりあげ、現在の行政による施策を歴史的に相対化していく動きも二〇世紀初頭に生じていたことは、廣木尚「日本歴史地理学会と吉田東伍(上)」『早稲田大学史紀要』五二、(二〇二二)四五―四七頁参照。後述する地方史への関心も含め、大久保の歴史叙述にもった意味は丁寧に検討される必要がある。たとえば『歴史地理』を拠点とした相田二郎について、大久保は大学三年の一九二六年夏に参加した醍醐寺の古文書整理の記憶として、「古文書といふものに打ちこんでいる相田さんのひたむきな姿は、未熟な僕に或る感銘をあたえた。」(前掲、大久保「方南以前」六九五頁)と記している。相田については佐藤雄基「明治期の史料探訪と古文書学の成立」(前掲、松沢編『近代日本のヒストリオグラフィ』)四八頁も参照。

(54) 同右、七六頁。前掲、同『日本近代史学事始め』六八一―六九頁。傍点は前田。

(55) 前掲、大久保「私の近代史研究」七二頁。

(56) 大久保利謙「現代史の概念」『教育手帖』三三、(一九五三)。

(57) 大久保利謙「経世家としての武田信玄」『教材講座』四一、(一九二九)一〇〇―一〇一頁。掲載や改稿の経緯は不明だが、前年に提出した卒論の一部だろう。「戦国時代から桃山時代にかけて、我国は闇黒から光明へと、混乱から統一へと、実にすばらしい転回を試みて居る。」との書き出し

「史学統一」の夢（前田）

で始まる同「戦国時代の鉱山業に就いて」『歴史教育』四一九、（一九二九）、および分国法を「初期武家法の末流と言ふよりも、近世封建法の序曲」と位置づける同「戦国時代の法制雑考」『古典研究』三一〇、（一九三八）も参照。

(58) 前掲、朝尾「解説」『国史上の社会問題』二〇一頁。

(59) 以下、政治史料課「大久保利謙先生に聞く（一）」『参考書誌研究』七三、（二〇一〇）九一―一、一六一―一七頁。傍点は前田。なお、大久保自身は九月一日、父親の利武とともに滞在していた那須の温泉で被災している。多くの温泉客が東京に拠点を置いていたため、翌日から騒然となったものの、電報・電信が使えず、近親者の生死もわからないまま不安な日々が続く中、一〇日後に大久保らは「決死隊」を結成して被災地の首都に向かい、状況を偵察して一週間ほどで那須に戻っている。その後、一〇月に入り京都に帰還しようである。不安が極大化した那須、壊滅的な打撃を受けた故郷の東京、全く被害のなかった京都、の三つの場を短期間に体験したのである。

大久保はまた、「大正大震災後」に「明治文化」の言葉が盛んに使われはじめた背景に、東京の古本屋が「殆んど全滅した」点を指摘し、「それまで紙屑同様だった明治物が一斉に骨董的な扱いをうけるようになった。私がようやく古本屋通いをはじめた頃で、あの頃のことにはよく覚えていません」と語っている（座談会「歴史教育における近代文学の取り扱いについて」『日本史の研究』三九、（一九六二）一七頁）。「大正大震災」という表現も印象深い。

(60) 大久保利謙『日本全史10 近代Ⅲ』（東京大学出版会、一九六四）三頁。傍点は前田。なお続く『近代Ⅳ』は、粗

稿」があり六五年九月刊行も予告されていたが、幻の著作に終わったため、大久保による震災後の「転換」の具体的な描写はついになされなかった。

(61) 若井敏明『平泉澄』（ミネルヴァ書房、二〇〇六）五〇―五四頁。もつとも史料編纂所に間借りせざるをえない状況は一四三五年の法文二号館完成まで続き、ついに国史研究室の独立が完全に果たされたときはすでに平泉グループが席卷していた。なお『東京帝国大学五十年史』下冊（東京帝国大学、一九三二）六五六―六五九頁は、キャンパス移動問題を「総合」大学の実を挙げるための「現実」派（本郷案）と「理想」派（大学都市案、代々木案）の対立として描出している。

(62) 石井進「黒板勝美」今谷明ほか編『20世紀の歴史家たち（2）日本編下』（刀水書房、一九九九）九七頁。なお一九七〇年前後の石井は、大正文化史学についても、原勝郎の問いを深化しなかったと批判しており、大久保と異なる史学史理解を示している。同『中世史を考える』（校倉書房、一九九二）一五・三四五頁。

(63) 大久保利謙「田口卯吉博士と黒板勝美博士」『日本歴史』一九四、（一九六四）二一〇頁。

(64) 大久保利謙「史体論——日本」大久保・海老沢編『日本史学入門』一七一―一八頁。また一九三七年の論考でも、田口卯吉は「新しき観点より過去のわが文化を分析し、総合し批判」したと、いわば大正文化史の先駆として評されている（『著作集』七、二三四頁）。

(65) 一九三七年の重野論で大久保は、重野が田口卯吉のような「新しき意味の歴史家」ではなく「編修官」の立場に制

約されており、その仕事も「文化史とか社会史、経済史」から重要性を見出されにくい限界を指摘するとともに、その史学思想のうちに「新しきものと古きものと競合があり、まさに過渡的時代を代表」するダイナミズムがあったことも付言する(『著作集』七、二四三―二四四頁)。

(66) 以下、大久保利謙「書評 三宅雪嶺著『同時代史』」『史学雑誌』六〇―六、(一九五二)七二―七三頁。傍点は前田。この記述は蟻川恒正の魅力的な仮説に拠る。蟻川・木庭 顕・樋口陽一「鼎談 憲法の土壌を培養する」『法律時報』一一二四、(二〇一八)七二頁。

(68) 坂口太郎「大正・昭和戦前期における徳富蘇峰と平泉澄」『松本清張研究奨励事業研究報告書』一九、(二〇一九)五七頁以下。平泉史学の弱点につき、同六三頁も参照。

(69) 齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』(法政大学出版局、二〇一五)二〇六頁。なお、大久保は晩年の黒板が取り組んだ日本古文化研究を、「総合的日本文化学」と言つてよい先生「黒板」独自の『国史大系』と位置づけている(前掲、大久保「黒板勝美先生の風格と学問」四六頁)。

(70) 前掲、大久保「黒板勝美先生の風格と学問」四九頁。この他、『東京帝国大学五十年史』編纂で平泉に代わって大久保の上司となる西洋史の今井登志喜(前掲、大久保「日本近代史学事始め」七五・七七・八二頁)も、一九二〇年代末には「全体史」としての「社会史」を、「文化史」との親近性を強調しつつ構想していた(城戸毅「解説」今井登志喜『英国社会史』下、(東京大学出版会、二〇〇一)Xvi―Xvii・XXii頁)。近代史への関心も含め、若き大久保の周辺の知的風土を窺わせる。そもそも日本では、ランプレヒトらと

学問観も日本観も対照的な、ネオ・ランケ学派のルートヴィヒ・リースに媒介されてドイツ歴史学を受容したにもかかわらず、その「政治史」学の前提にあった哲学的・理論的な観念複合以上に、リースが否定的だった「新しい文化史学」や社会史がいち早く受容されていった逆説が指摘されている(西川洋一「東京とベルリンにおけるルートヴィヒ・リース」『東京大学史料編纂所編』歴史学と史料研究(山川出版社、二〇〇三)、二〇九―二二頁)。西川は、ネオ・ランケ学派よりもランプレヒトを愛好した日本の経験がドイツ以外の諸国でより普遍的だった可能性も示唆しているが、黎明期の東大文学部でこうした「政治史」学の基盤が歴史的に希薄だった事実は、戦後の大久保がむしろ政治史研究者として記憶されていることを考えると、興味深い。

なお大久保は京大在学中に、文化史の火付け役の一人だった西洋史家・大類伸の講演を聞いたという(前掲、「座談会 日本における史学の発達」二五二頁)。

(71) 一九二六年に平泉を囲む学生の講読会(「演習グループ」)に大久保とともに参加していた萩野三七彦は、後年大久保から笑い話で「僕も君も、平泉先生からは破門されたね」と言われたという。萩野「助教教授平泉澄先生」『日本歴史』四二八、(一九八四)四八頁。

(72) 一九六三年に立教大学を卒業した教え子がその後結婚式を挙げたとき、大久保は自身の隣の席に「平泉澄先生の三男」が座ることを聞いて喜んでゐる。石倉紘子「大久保先生の思い出」『史苑』五七一、(一九九六)一一九頁。前掲、大久保『日本近代史学事始め』六五頁も、「いまでもわたしは、平泉先生に対しては懐かしい想い」があると告白する。

「史学統一」の夢（前田）

- (73) 大久保利謙「大正末期史学界の状況」『史苑』二八一—、(一九六七)。
- (74) 大久保利謙「古事記に見はれたる上代人の人生観」『輔仁會雜誌』一一五、(一九二二)四五頁。
- (75) 大久保利謙「津田左右吉の歴史学について」聞き手：今井修、「津田左右吉全集補巻2 月報(第二次)」(岩波書店、一九八九)一一二頁。
- (76) 以上、今井修「丸山眞男と津田左右吉(四)」『丸山眞男手帖』三六、(二〇〇六)五三頁。同「大正末年」の津田左右吉」『文学』二一四、(二〇〇一)一五四—一五五頁。今井によれば、芥川龍之介のような同時代人も、津田の二項対立の構図を逆(芸術批評)の立場から共有していた。
- (77) 西川洋一「『パフォーマティブ・ターン』の中の中世国制史」『国家学会雑誌』一三一—一・二、(二〇一八)八一—九頁。ドイツ史学思想史について、ゲールハルト・シュツク「二九〇〇年前後の歴史諸学間における近代的社会化の理論——モデルネの危機の文脈における社会的紀律化観念の形成によせて」和仁陽訳、『法制史研究』四六、(一九九七)も参照。
- (78) 石母田正「古代貴族の英雄時代——『古事記』の一考察」同「神話と文学」岩波現代文庫、(岩波書店、二〇〇〇、初出一九四八)五頁。
- (79) 前掲、大久保「津田左右吉の歴史学について」七頁。後年のものだが、「ぼくは世間でいう私学のもので官学のものでもなく、ただのぼくであった」という津田の言は示唆的である(今井修編『津田左右吉歴史論集』岩波文庫、(岩波書店、二〇〇六)、二二二頁)。大久保における「私学的・在野的・民間的」な歴史叙述へのやや外在的で前のめりの期待を、逆照射しているともいえよう。
- (80) 以上、「座談会 日本近代史の検討」『法政』八一—九、(一九五九)一六一—一七頁。小西四郎と和歌森太郎との鼎談。
- (81) 大久保自身は文化史が対象にすべき「文化現象」の範囲を、京都史学や平泉より広く、「政治も、経済をも含めた文学・芸術・思想」と捉えていた節がある。「幕末から明治へ」柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会 明治・大正文化史(1)』岩波現代文庫、(岩波書店、二〇〇〇、初出一九五七)五一—六頁。傍点は前田。
- (82) 以上、「著作集」七、一九六一—一九七頁。
- (83) 今井修「歴史の思想」苅部直ほか編『岩波講座 日本思想』1、(岩波書店、二〇一三)一〇八頁を参照。
- (84) 大久保利謙「憲政記念館と憲政資料室・国立公文書館——大正以降のわが国憲政史研究の回顧」衆議院憲政記念館編『憲政記念館の二十年』(衆議院憲政記念館、一九九二)一五一—一六頁。
- (85) 同右、一八頁。なお、伊東治正が戦中に開催した「憲法史研究会」(主要な公法学者・憲法学者、さらに岡義武や尾佐竹、鈴木、大久保も参加)について大久保は微妙な距離感を覗かせている。ここでは憲政史編纂会の「いわば間接副産物」という、婉曲ながら先行者の矜持の窺える位置づけを与えており(同右一七頁)、また別の回顧でも憲法史研究会は「憲政史編纂会の外郭団体」として回っている。(前掲、大久保「私の近代史研究」六八頁)だと述べている。
- (86) 戦中ということもあり渡辺が「しきりに明治天皇をかっぎあげ、弟子の深谷も「真顔で」「君万民」を盛んに語り、それを「鈴木君がニヤニヤ笑ってそばからひやかす」とい

う構図だったようである(前掲、大久保「私の近代史研究」六七頁)。鈴木への「所謂左翼憲法学者」という表現(前掲、大久保「憲政記念館と憲政資料室・国立公文書館」一五頁)も、多分に親しみを込めたものだろう。深谷もまた、研究をまとめる原動力となった「畏友鈴木安蔵氏の友情」に特別の謝辞を捧げている。同『初期議会・条約改正』(白揚社、一九四〇)二頁。

(87) 前掲、大久保『佐幕派論議』一八五頁。

(88) 大久保利謙「総論」同編『体系日本史 政治史Ⅲ』(山川出版社、一九六七)四頁。

(89) 前掲、大久保『日本全史 近代Ⅲ』一九六頁。

(90) 前掲、政治史料課「大久保利謙先生に聞く(一)」一二頁。「左」とは、鈴木安蔵に付された表現ではあるが、民権運動史料の収集を指しており、「在野」とほぼ同義であろう。

(91) 前掲、大久保「憲政記念館と憲政資料室・国立公文書館」一一二頁。

(92) 宮間純一「在野の文化史研究にみる風俗史の位置」『風俗史学』五一、(二〇一三)四八―四九頁。

(93) 大久保は吉野も尾佐竹も、公職はありつつも研究会の推進はそれを離れて「在野人としての立場」で歴史叙述に従事したと考えていた。「座談会 維新史研究の歩み 第二回——明治文化研究会をめぐって」『日本歴史』二四七、(一九六八)三頁。

(94) 政治史料課「大久保利謙先生に聞く(二)」『参考書誌研究』七四、(二〇一〇)二六頁。

(95) 注二八と同じ。

(96) 「座談会 維新史研究の歩み 第六回——明治憲政史を中

心として」『日本歴史』二五一、(一九六九)八四頁。

(97) 前掲、政治史料課「大久保利謙先生に聞く(二)」二九頁。

(98) 前掲、大久保「私の近代史研究」六七頁。

(99) 荒船俊太郎「深谷博治旧蔵文書の研究」『国文学研究資料館紀要 アークイブズ研究篇』二、(二〇〇六)三三―四七頁。

(100) 「佐藤能丸氏」(平成一一・一二年度科学研究費(基盤研究(B)(1))成果報告書『日本近代史料情報機関設立の具体

化に関する研究』(<http://kms.jp/pdf/26sato.pdf> 二〇一一年一月一八日最終閲覧)。榎田克巳『歴史の旅路』(私家版

一九八五)一〇六頁以下、一三二頁も参照。なお大佛没後の一九七三年一〇月から七四年三月、朝日放送制作、今野勉

蔵原惟繕、黒木和雄、伊丹十三らの演出でテレビ放映された全二六回のドキュメンタリーにも、大久保は三回出演したようである(Wikipedia「天皇の世紀」の二〇二一年九月一九日更新版)。

(101) 洞富雄「深谷博治先生を悼む」(『史観』九三、一九七六)。門下代表として鹿野政直が挨拶を行っている。

なお、戦後初期の学生団体・東大歴史学研究会(東大歴史研)近代史部会では、「学生」歴史の会合と称して「早稲田大学に深谷の講義を聞きに行く雰囲気があった」という。聴講を学生に推したのは、当時史料編纂所で読書会を開催していた遠山茂樹であり、早大歴研がその便宜を図っていた(犬丸義一「一九六〇〜七〇年代の犬丸義一さん」『歴史評論』八〇九、二〇一七)七一―七二頁)。また早稲田側でも、深谷から指導を仰いだ学部時代の由井正臣は、学生歴研の活動を通じて遠山や山辺健太郎の薫陶を得たようである(安在邦夫「由井正臣先生のご逝去を悼む」(『史観』

「史学統一」の夢（前田）

一五九、二〇〇八）一一三頁。

深谷に早稲田で「師事」したと語る鹿野によれば、一九五〇年代の深谷はゼミでE・H・ノーマン『日本における近代国家の成立』を、また研究会では遠山の『明治維新』をテキストにとりあげ、参加者には一行一行音読させて精読したという（鹿野政直『明治維新』とわたし）『遠山茂樹著作集第7巻 月報4』岩波書店、一九九二、五頁。後者の研究会とはおそらく、深谷が主宰し、鹿野や中村尚美が参加して「戦後早稲田の草創期の日本近代史研究者を育む母胎」になった「近代日本史研究会」のことと思われる（由井正臣「日本近代史への開眼」『史観』一四七、二〇〇二）一一二頁。

(102) 三浦周行も一九二八年の著作で文化史と唯物史観の対抗関係を（前者の観点から）指摘している。古澤直人「日本近代法史学史における「中世」」〔『法制史研究』四六、一九九六〕一三三—一三四頁。

(103) 『羽仁五郎歴史論著作集』一（青木書店、一九六七）三三—四五頁。

(104) 前掲 大久保「総論」『政治史Ⅲ』四頁。

(105) 前掲 大久保「佐幕派論議」一八六頁。

(106) 前掲 大久保「史体論——日本」一八頁。

(107) 石母田正「序論」（前掲、同編『日本史学史』）九頁。石母田は『中世的世界の形成』（岩波文庫、一九八五）の三五頁でも、王朝後期の貴族社会の中の「中世文化の先駆となった新しい精神的所産」を過大評価することを戒め、文化だけを孤立して論じるのではなく、「政治を骨格として進展する歴史の全体的連関」のなかに置く必要を説く。石

母田の「文化」観について、『日本の古代国家』（岩波文庫版、二〇一七（初版一九七〇）二五八頁も参照。なお、石母田を政治史家と位置づけ、その「政治」観に着目した魅力的論考に、大山喬平「石母田中世史の軌跡」（同『ゆるやかなカーブ社会・日本』校倉書房、二〇〇三、初出一九八七）。

(108) たとえば西田直二郎門下の奈良本達也が、文化と経済、それぞれから全体を志向する文化史学と（講座派的）社会経済史学の両学知が「実証主義史学ないし文献史学に対する共同のフロントに立つ」展望をもっていたと指摘するのは、望田幸男『ドイツ史学徒が歩んだ戦後と史学史的追想』（本の泉社、二〇一九）八七—八八頁。

また『日本資本主義—発達史講座』の論文部分は第一部「明治維新史」、第二部「資本主義発達史」、第三部「帝国主義日本の現状」からなるが、研究会の過程では「文化史」を第三部として第二部から独立させる構成案（『帝国主義日本の現状』は第四部へ）も有力だったようである（一九三一年九月二〇日付平野義太郎宛野呂栄太郎書簡、『野呂栄太郎全集』下（新日本出版社、一九九四）三九七頁）。「文化史」が部会題目から最終的に外された経緯は不明であるが、実際に近い構成をとった岩波書店の予約募集冊子（同三九九頁以下）では、第二部中の五「文化史」の下位項目として文化運動史・経済思想史・社会思想史・教化史・自然科学史が挙げており、こうした内容を明治維新・資本主義・帝国主義とならぶ大テーマに集約する構想だったのかもしれない。

(109) 一九三八年に肥後和男が木代修一に対して述べたものである。中野目徹「ある文化史家の戦前—戦後——木代修

- 一「過眼日抄」の紹介」(『筑波大学アーカイブス年報』三、二〇二〇) 三一頁。また、社会経済史的な「実証主義」と西田の文化史を対比させた「脇田修氏、脇田晴子氏に聞く」(『日本史研究』六一七、二〇一四) 五三―五五頁も参照。
- (110) 大山喬平は、林屋辰三郎も含め戦前との断絶を見ている。「大山喬平氏の中世身分制・農村史研究の軌跡」(『部落問題研究』二一八、二〇一六) 八八―九〇、九六―九七頁。
- (111) 家永文化史の史学史上の位置は、森田喜久男「思想史から文化史へ——『日本文化史』を読む」(『歴史評論』八六〇、二〇二二) 五〇―五一頁を参照。
- (112) 家永三郎「文化史と文化遺産の問題」(『思想』三九五、一九五七)。また直木孝次郎も、美術史家ヴィンケルマンの流れをくんだ西田や和辻の「かつての文化史」が「静的であり現象的」だったのに対し、「新しい文化史」は「動的かつ構造的」であることが要求されると述べている(直木「書評日本史研究会編『講座日本文化史』二」(『日本史研究』六五、一九六三)。石母田らの文化史批判とは異なる系譜だが、戦前の文化史学の再生は許されていない。
- (113) 菊池克美『学問彷徨』(比較文化研究所 二〇二〇) 一七六頁の家永三郎書簡。なお、大山喬平『日本中世のムラと神々』(岩波書店、二〇一二) 一九二頁は、西田の『日本文化史序説』より未公刊の学位論文『王朝時代の庶民階級』(一九二四) をはるかに高く評価している。
- (114) 『著作集』七、六〇―六一頁。
- (115) 羽仁五郎は、恩師の黒板勝美が『国史の研究』初版を出した一九〇八年当時、「国史」という言葉が「はじめ多少進歩的の意味をふくんでいた」という興味深い指摘をしてい

る(羽仁「現代に生きる歴史学徒の任務」(斎藤孝編『羽仁五郎歴史論抄』筑摩書房、一九八六、初出一九六六(日本史研究会創立二〇周年記念講演) 一一―一五頁)。

他方で大久保は、新制高校社会科の歴史科目が当初の「国史・世界史」から一九四九年に「日本史・世界史」と変更された経緯に触れて「国史はあとで皇国史観がくつついたのですが、国史そのものは必ずしも本来、皇国史観でもないでしょう」と指摘し、そうした非皇国史観の「国史」は、米国側があてた「ナショナルヒストリー」とも含意が異なることを示唆している(「座談会 戦後国史教育の再開をめぐって」『歴史と地理』一一五、一九八二) 四四頁)。

(116) 大久保利謙「はしがき」(前掲、大久保・海老沢編『日本史学入門』) 一一―二頁。傍点は前田。

(117) 前掲、大久保『日本全史10 近代Ⅲ』二〇三―二〇四頁。傍点は前田。

(118) 大久保利謙「歴史に於ける美しさ」(『知性』六一一、一九四三) 六四―六五頁。六五頁。大久保は後年、西周「美妙学説」に見られる明治官学以前の「美(や、情)」の追究が、「帝王学」の一端でもあった点に注目している。同「明治美学前史」(前掲『佐幕派論議』所収、初出一九七五。「美妙学説」については、長尾宗典『憧憬』の明治精神史』(ベリかん社、二〇一六) 四四―四六頁)。

大久保史学における美は、従来ほとんど注目されていないが、おそらく一九八四年に立ち上げた明治美術研究会まで連なる主題である。芳賀徹『絵画の領分』(朝日選書版、一九九〇) 六三四頁、歌田眞介「明治美術研究学会事始」(『近代画説』一四、二〇〇五)。

「史学統一」の夢（前田）

- (119) 一九四二年『歴史学研究』に掲載した論文でも、大久保は「わが国の史学が学として独立の過程」が「教訓的歴史からの解放」であったとの構図を示している（『著作集』七、六九頁）。
- (120) こうした真善美の統一としての「歴史」像には、皇国史観の前線に当時あった旧師・平泉澄が、大久保の学生時代に展開した、日本文化史の「時代精神」を古代の純、上代の美、中世の聖、近世の善、現代を真、とする時代区分論を相対化する意味もあつたのかもしれない。平泉澄「日本精神発展の段階」（『史学雑誌』三九一四、一九二九）、同「中世文化の基調」（『史林』一四一、一九二九）、ともに『国史学の骨髄』（至文堂、一九三三）。前掲、若井「平泉澄」九三頁以下も参照。また、神皇正統記の位置づけも、平泉（同上八九一頁）とは異なる。
- なお土屋喬雄を介して大久保と接点のあつた民俗学者・渋沢敬三が新カント派的な「真善美」価値体系を持ちながらも、「善」をオミットして「美」と「真」（実証）に傾斜したことが指摘されており、興味深い。前掲、由井・武田編『歴史の立会人』一一・二一・二七・三八・二〇六頁、二六六頁以下。ここに、世紀転換期に公定的美術史と異なる独自の歴史叙述を構想した高山樗牛以来の、美と道徳（至善）の連関を切斷する志向を見出すこともできよう。前掲、長尾『憧憬』の明治精神史』二四一―二四二・二五八―二五九頁。
- (121) 大類伸『現代史学』（弘文堂、一九四二）（中のおそらく「政治史と文化史」）が本稿で言及されている。
- (122) 「日本歴史観の確立」座談会（『文藝春秋』二〇一八、一九四二）六八―六九頁。
- (123) 前掲、大久保「日本近代史学事始め」九八一―〇三頁。
- (124) 同右、一〇四頁。大久保利謙「同志社大学の愛山文庫を訪ふ」（『明治文化』一六―五、一九四三、のち前掲『佐幕派論議』所収）。
- (125) 大久保利謙「西周の歴史観」（『著作集』六、初出一九四三）、同「内村鑑三とナショナルリズム——「地人論」と「興国史談」（『著作集』八、初出一九五六）。
- (126) 前掲、政治史料課「大久保利謙先生に聞く（一）」一六・二六頁。
- (127) 『著作集』七、二二―二四・二三〇―二三一・四〇四頁。頼山陽の『日本外史』を「政治的な史学」と位置づける同二六六頁の記述も参照。こうした政治（運動）指導者における歴史編纂という視点は、岩倉具視論にも引き継がれていく（同三二六頁以下）。藩閥勢力が衰頹期になつてはじめて歴史叙述に着手し「藩閥史観」が出現するという洞察（同三六六頁）も、この視点の延長上と考えられる。
- (128) しかも、大久保が堺利彦や羽仁五郎を批判して述べるように、それぞれの「史観」のうちにも「さまざまなニュアンスのちがひ」があるのであり（『著作集』七、三六七頁）、具体的に即した繊細な分節化が必要となる。
- (129) 大久保利謙「日本史総論」（前掲、同・海老沢編『日本史学入門』五頁）。
- (130) 前掲、大久保「佐幕派論議」一八五頁。
- (131) 『著作集』七、一〇九頁。
- (132) 大久保利謙「地方史の編纂」（黒板博士記念会編『古文化の保存と研究』吉川弘文館、一九五三）。
- (133) 金原左門「大久保さんと「神奈川県史」のこと」（『みすず』

四二〇、一九九六）四七頁。

- (134) ランプレヒトおよびライプツィヒ大学がドイツでの近代的な地方史研究の成立に果たした役割については、西川洋一『Volksgeschichte und Verfassungsgeschichte——ドイツ国制史研究史への一視角』、『国家学会雑誌』一〇九—九一〇、一九九六—一五〇頁以下。

- (135) 入山洋子『京都市史』編纂と歴史学——西田直二郎の挑戦（小林丈広編『京都における歴史学の誕生』ミネルヴァ書房、二〇一四）一二四—一二五頁。また戦間期京都では、本庄黒正ら社会経済学派も、地方史研究の刷新や郷土史家との連携を重視する姿勢を打ちだしていた。前掲、『本庄栄治郎著作集』一〇、二七六・二八四・三〇〇・三四一頁。

- (136) 戦後歴史学における展望に、藪田貫「栗野頼之祐と「北摂郷土史学運動」——もうひとつの戦後歴史学」(Link)一〇、二〇一八)。また七〇年代から古島敏雄らによって「郷土史の復権」があったという指摘もあり(大石学「本書刊行の意図・経緯と構成」(地方史研究協議会編『地方史・地域史研究の展望』名著出版、二〇〇二)八頁)、単純に「戦前の郷土史から戦後の地方史へ」という理解ではおそらく史学史としては不十分である。戦前については、若井敏明「皇国史観と郷土史研究」(『ヒストリア』一七八、二〇〇二)。
(137) 鹿野政直・今井修「日本近代思想史のなかの久米事件」(大久保利謙編『久米邦武の研究』吉川弘文館、一九九二)三一—五頁注八〇。

- (138) 田尻八郎宛大久保利謙書簡、「遊子の心悲しく」(田尻八郎『筑前秋月のこころ』創言社、一九七〇)二一—八頁。田尻は秋月の郷土史家の歌人である。大久保は九州大学で集

中講義をおこなった折に箭内健次と田尻に案内されて秋月を訪問し、観光客も訪れないう秋月の乱の故地から強い印象を受けている。共通した不平等意識によって各地が結びつけられた土族反乱の理解には「どうしても各反乱発生の地、風土、とくに各地間の距離、交通路などを具体的に頭をいれておく必要がある。」との問題意識が、大久保が現地に運ぶ原動力であった(大久保利謙『集中講義』(『月刊歴史と旅』一—四—四、一九七四)一三五頁)。

- (139) 「励ましの言葉 大久保利謙先生」(『多摩文化』二三(多摩の洋学)、一九七二)九七頁。圏点はママ。

- (140) 大久保利謙「明治文化と郷土史」(日本歴史地理学会編『郷土史研究の調査と方法』地人書館、一九四四)三四—六頁。

- (141) 同右、三六一頁。

- (142) 大久保利謙『日本近代文藝』(三笠書房、一九三九)二八頁。

- (143) 木庭頭『人文主義の系譜』(法政大学出版局、二〇二一)二九—七頁。

- (144) たとえば家永三郎は自らを「実証主義の立場」と規定し(今井修「家永三郎という歴史家について」(『歴史評論』八六〇、二〇二二)一四頁)、そこから文化史、女性服装史、歴史小説にまでいたる広範な業績を築いたが、「アカデミズム史学と在野的研究との分裂を止揚し、私たちの歴史的真実に対する視野を拡大」するという表明(家永『歴史家のみた日本文化』(雄山閣、一九八三、初版一九六五)九七頁)は大久保とも通じ合う。また、大久保の立教の同僚だった井上幸治(成瀬治『世界歴史事典』と読書会のこと)『井上幸治先生追悼文集』私家版、一九九一)や、後進の石井進(同『日本中世国家史の研究』(岩波書店、

「史学統一」の夢（前田）

一九七〇）五頁）、秦郁彦（同『実証史学への道』中央公論新社、二〇一八、一四・一七九・一八七頁）のような歴史家との比較検討も、「実証主義」史学思想史の課題だろう。

(145) 田中彰「大久保先生の学問的情熱」（『みすず』一九九六）四二頁。

(146) 大久保利謙「書評 海後宗臣著『教育勅語成立史の研究』（『史学雑誌』七六一四、一九六七）九二・九五―九六頁。

(147) 以上『著作集』七、八二・七六頁。

(148) 大久保利謙「日本近代の歴史学（二）」（『国民の歴史』二、一九四七）六九頁。脱稿は一九四六年二月。

(149) 前掲、大久保『日本全史10 近代Ⅲ』二頁。傍点は前田。

(150) 島津家の歴史編纂を論じた一九三九年の『史学雑誌』論文で、大久保は『皇朝史観』が紀伝体を編年体に改めるという困難を実現したことを、「相当の工作が必要」と総じて好意的に言及している（『著作集』七、二二―二頁）。

(151) もつとも、後年の「基礎工作」は、「歴史学徒」のなかの「とかく歴史を理論的に割りきらないと承知しない人の「偏向」を修正する手段として評価されている。大久保利謙「基礎史料の尊重」（『歴史研究』一〇〇、一九六九）。

(152) 服部之総「歴史の見方について」（同『近代日本のなりたち』日本評論社、一九四九）一―三頁。浅井良夫「政治経済史の復権」（『年報・日本現代史』二六、二〇二一）一七三頁も参照。

（北海道大学法学研究科准教授）